南島原市文化財調査報告書　第10集

古 作 遺 跡

―小林地区農道整備事業に伴う発掘調査―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書　第10集

古 作 遺 跡

―小林地区農道整備事業に伴う発掘調査―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

南島原市深江町に所在する古作遺跡は，小林地区農道整備事業に際して平成24年度に実施した試掘・範囲確認調査によって新たに発見された遺跡です。

平成25年度の本発掘調査では，縄文時代や中世の遺構･遺物が検出され，特に縄文時代早・前期のものと縄文時代後・晩期のものとが充実した内容でした。縄文時代の早期末から前期初頭の時期に位置づけられる轟式土器は，市内初出土ということで，今回の発掘調査によって，またひとつ本市の貴重な埋蔵文化財の存在が明らかとなりました。

私たちは，これらの埋蔵文化財をしっかりと責任をもって後世に伝えていかなければなりません。これからもそのことを胸に，自覚をもって埋蔵文化財の保護と記録保存に努めてまいる所存です。

本書が，歴史の教育と研究，文化財愛護思想の普及のために広く活用されることを願います。

最後になりましたが，調査を実施するにあたり格別のご配慮とご協力を賜りました地元の方々と事業関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成30年3月31日

南島原市　教育長　永田　良二

例　　言

1　本書は，古作遺跡（長崎県南島原市深江町古作所在）の発掘調査報告書である。

2　調査は，南島原市が事業主体である小林地区農道整備事業に伴って実施した。

3　調査は，長崎県南島原市教育委員会が主体となって実施した。

4　調査における写真撮影は，本多和典が行った。また，遺構配置図および土層実測図の作成，航空写真の撮影は，㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

5　遺物の洗浄・注記などの基礎整理は，照平八千代，中川愛里，溝田利枝，池田久美子が行った。遺物の実測は，上田五月，佐藤三夏，本多が行った。製図は，上田，本多が行った。遺物の写真撮影は，本多が行った。

6　本書に関する遺物，図面，写真等は，南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。

7　本書の刊行にあたって，以下の方々からご指導，ご協力をいただいた。記して謝意を表します。

長井大輔，中尾篤志，林田好子，松尾直子（五十音順，所属・敬称略）

8　本書の執筆・編集は，本多による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第1節　調査に至る経緯 ……1
　第2節　調査の期間と面積 ……2
　第3節　調査組織 ……2

第Ⅱ章　位置と環境……3
　第1節　地理的環境 ……3
　第2節　歴史的環境 ……3

第Ⅲ章　試掘・範囲確認調査……5
　第1節　調査トレンチの設定と調査の方法 ……5
　第2節　試掘・範囲確認調査の成果 ……5

第Ⅳ章　本調査……8
　第1節　調査区の設定と調査の方法 ……8
　第2節　本調査の成果 ……9

挿図目次

第1図　小林地区農道と末宝遺跡…… 1
第2図　古作遺跡の位置…… 4
第3図　深江町の代表的な遺跡…… 4
第4図　調査トレンチの配置…… 6
第5図　本調査区の位置…… 6
第6図　調査トレンチの土層実測図…… 7
第7図　本調査区のグリッド設定…… 8
第8図　本調査区の土層実測図①…… 10
第9図　本調査区の土層実測図②…… 11
第10図　本調査区のⅥ層上面遺構実測図…… 12
第11図　本調査区のⅢb層上面遺構実測図 …… 13
第12図　溝・土坑の土層実測図…… 14
第13図　縄文時代早・前期の土器①…… 16
第14図　縄文時代早・前期の土器②…… 17
第15図　縄文時代早・前期の土器③…… 18
第16図　縄文時代後・晩期の土器①…… 19
第17図　縄文時代後・晩期の土器②…… 20
第18図　縄文時代後・晩期の土器③…… 21
第19図　縄文時代後・晩期の土器④・その他の土器…… 22
第20図　Ⅴ層出土の石器①…… 27
第21図　Ⅴ層出土の石器②…… 28
第22図　Ⅲ層出土の石器①…… 29
第23図　Ⅲ層出土の石器②…… 30
第24図　土器・石器の分布［全体］…… 33
第25図　土器の分布①［全体］…… 33
第26図　土器の分布②［1群A～C類］…… 34
第27図　土器の分布③［1群D～F類］…… 34
第28図　土器の分布④［1群G類］…… 35
第29図　土器の分布⑤［2群］…… 35
第30図　石器の分布①［全体］…… 36
第31図　石器の分布②［黒曜石A～D］…… 36
第32図　石器の分布③［Va・Vb層出土の黒曜石A］…… 37
第33図　石器の分布④［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の黒曜石A］…… 37
第34図　石器の分布⑤［Va・Vb層出土の黒曜石B］…… 38
第35図　石器の分布⑥［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の黒曜石B］…… 38
第36図　石器の分布⑦［Va・Vb層出土の黒曜石C］…… 39
第37図　石器の分布⑧［Va・Vb層出土の黒曜石D］…… 39
第38図　石器の分布⑨［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の黒曜石D］…… 40
第39図　石器の分布⑩［サヌカイト・玄武岩A～C］…… 40
第40図　石器の分布⑪［Va・Vb層出土のサヌカイト］…… 41
第41図　石器の分布⑫［Ⅲb上・Ⅲb下層出土のサヌカイト］‥ 41
第42図　石器の分布⑬［Va・Vb層出土の玄武岩A］…… 42
第43図　石器の分布⑭［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の玄武岩A］…… 42
第44図　石器の分布⑮［玄武岩B］…… 43
第45図　石器の分布⑯［玄武岩C］…… 43
第46図　石器の分布⑰［砂岩・安山岩］…… 44
第47図　石器の分布⑱［凝灰岩・頁岩・チャート］…… 44

表目次

第1表　土器観察表①…… 23
第2表　土器観察表②…… 24
第3表　土器観察表③…… 25
第4表　石器観察表…… 31
第5表　出土遺物内訳…… 32
第6表　出土土器群類別内訳…… 32
第7表　出土石器石材別内訳…… 32

図版目次

図版1　航空写真（南から）…… 47
図版2　航空写真（北から）…… 48
図版3　航空写真（俯瞰）…… 49
図版4　本調査区表土剥ぎ前の状況（東から）…… 50
　　表土剥ぎ状況（西から）…… 50
図版5　調査区北壁土層（南から）…… 51
　　調査区北壁土層（東から）…… 51
図版6　Ⅲ層遺物出土状況（西から）…… 52
　　Ⅴ層遺物出土状況（東から）…… 52
図版7　溝検出状況（北東から）…… 53
　　土坑検出状況（東から）…… 53
図版8　遺物出土状況…… 54
図版9　縄文時代早・前期の土器①…… 55
図版10　縄文時代早・前期の土器②…… 56
図版11　縄文時代後・晩期の土器①…… 57
図版12　縄文時代後・晩期の土器②…… 58
図版13　縄文時代後・晩期の土器③・その他の土器…… 59
図版14　Ⅴ層出土の石器…… 60
図版15　Ⅲ層出土の石器…… 61

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

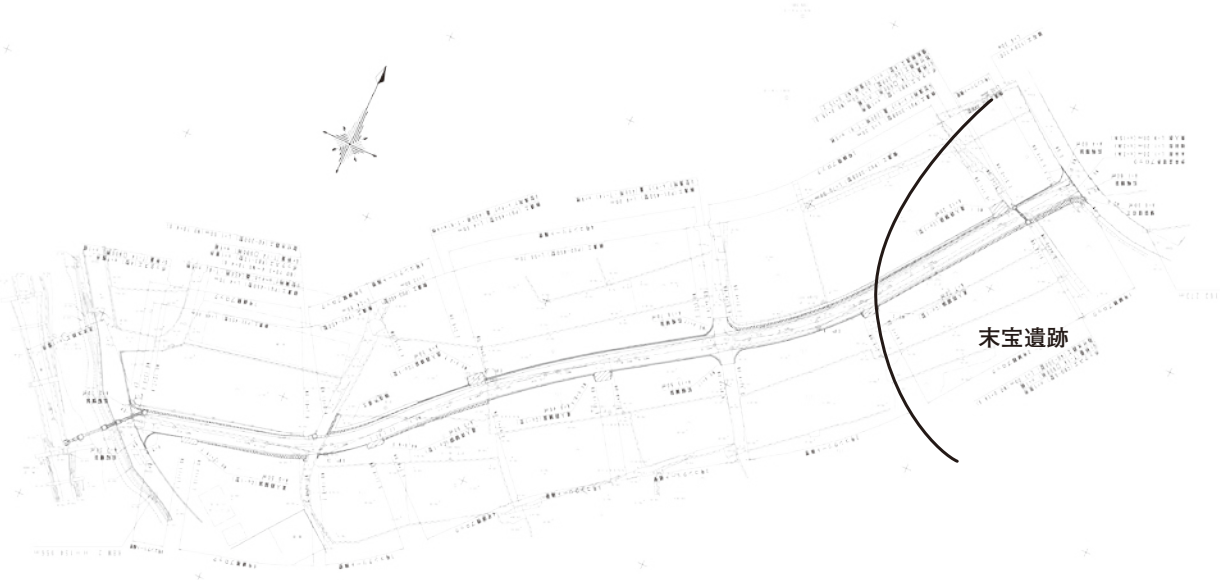
南島原市深江町字古作において，市農林水産部農村整備課により小林地区農道整備事業が計画された。計画は，東西に走る既存農道の拡幅・舗装に加え，西側に延長して中の間川左岸沿いを縦走する生活道路と新規に接続させるものであった。

計画路線の東西両端の取り付き部については，西側は中の間川沿いの縦道を下れば末宝公民館に至り，東側は下れば南島原市立小林小学校へと通じる。なお，路線計画の西側取り付き部については，事業計画の過程で変更が生じ，やや山手の北側に路線がずらされた。

事業計画地は，路線東側の一部が末宝遺跡の範囲内に含まれており，周辺耕作地においても遺物の表面採集が可能であったことから，平成24年度に南島原市教育委員会文化財課が調査主体となって試掘・範囲確認調査を実施することになった。

11箇所の調査トレンチを設けて試掘・範囲確認調査を実施した結果，末宝遺跡内においては後世の削平などによって遺構や遺物の埋蔵は確認されなかったが，隣接地の調査トレンチ1箇所で縄文時代を主体とする遺物包含層が確認され，このことから，新規発見の遺跡として古作遺跡の登録を行った。

このことを受け，事業主体である市農村整備課をはじめとした関係機関・関係者と協議を行い，計画路線のうち古作遺跡にかかる部分について本調査を実施した。



第1図　小林地区農道と末宝遺跡（S=1/2,000）

第2節　調査の期間と面積

試掘・範囲確認調査及び本調査の調査期間と調査面積は，以下のとおりである。

試掘・範囲確認調査

調査期間　平成24年7月23日～平成24年8月2日

調査面積　合計44㎡（調査トレンチ11箇所）

本調査

調査期間　平成25年11月27日～平成26年1月31日

調査面積　256㎡

第3節　調査組織

調査主体及び調査担当は，以下のとおりである。

調査主体

南島原市教育委員会	教育長	定方　郁夫（～平成26年7月）
	同　上	永田　良二（平成26年8月～）
	教育次長	水島　文昌（～平成25年度）
	同　上	渡部　　博（平成26年度～平成28年度）
	同　上	深松　良蔵（平成29年度）
	文化財課長	松本　慎二
	文化財課文化財班長	林田　順助（～平成25年度）
	同　上	木村　岳士（平成26年度～）

調査担当

南島原市教育委員会　　文化財課文化財班　主査（学芸員）　本多　和典

第Ⅱ章　位置と環境

第1節　地理的環境

長崎県の南部に位置する胃袋状の形をした1周おおよそ100㎞の島原半島は，北部から東部にかけては有明海に，西部は橘湾に面している。南方は半島と天草下島との間の早崎瀬戸を抜ければ，東シナ海へと通じている。半島の中央には雲仙火山の20を超える山々がそびえ，四方に裾野を広げている。

島原半島の主峰は，標高1,359mの普賢岳であったが，平成2（1990）年11月17日，198年ぶりに噴火した普賢岳は，その後山頂に溶岩ドームを成長させて平成新山を形成した。この平成新山，標高1,483mが現在の新たな半島の主峰となっている。

普賢岳の平成噴火では，山頂の溶岩ドームが成長と崩落を繰り返すなか，平成3（1991）年6月3日には上木場地区をそれまでで最大級の火砕流が襲い，死者・行方不明者合わせて43名を出す大惨事となった。普賢岳の溶岩供給が終わり，噴火活動が鎮静化した現在は，普賢岳東斜面を中心にさまざまな防災事業が進められており，水無川流域では土石流対策としてのかさ上げ事業，砂防事業，溶岩ドームの崩落を想定した導流堤の建設とその補完工事などが行われている。

また，これ以外にも普賢岳の有史以来の噴火活動は二度記録されていて，1663-1664年の寛文の噴火と1792年の寛政の噴火とがある。寛政の噴火時には，眉山が山体を崩壊させ，その土砂が有明海へと流れ込んで津波を発生させ，肥前・肥後あわせて1万5千人もの死者・行方不明者を出している。世にいう「島原大変肥後迷惑」である。

古作遺跡の所在する深江町は，半島東部に位置し，南島原市では最北部にあたる。普賢岳東麓の火山性の扇状地で，海岸は深江・布津断層の断層活動によって大きく湾入している。有明海を挟んで対岸は，熊本平野と宇土半島に対峙する。

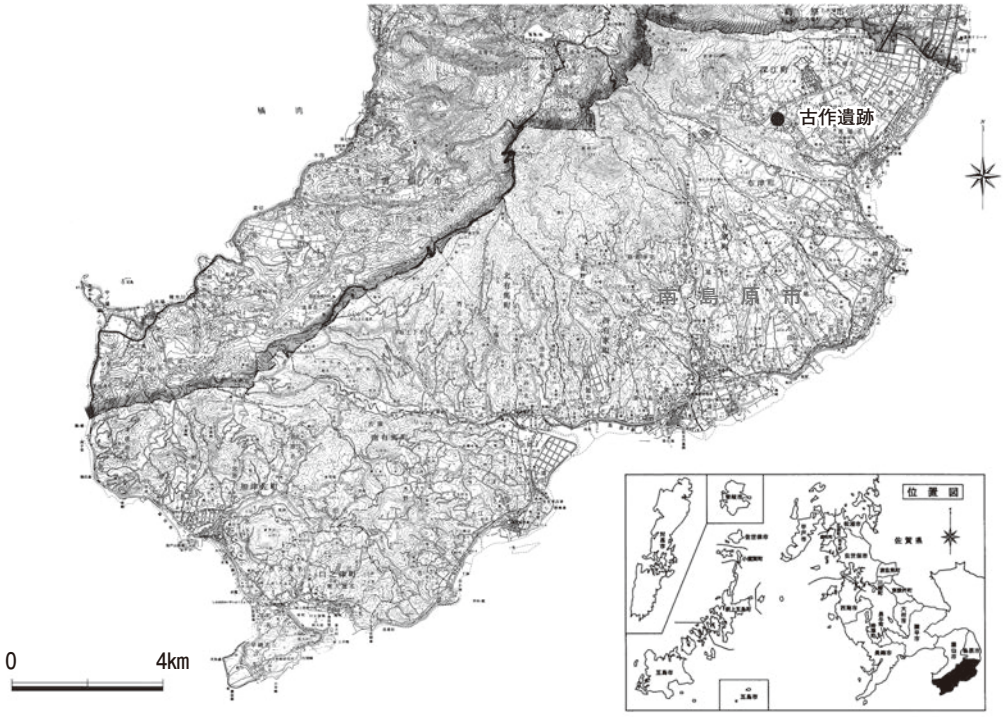
古作遺跡は，中の間川左岸の緩やかな斜面上に立地する標高160m弱の地点である。

第2節　歴史的環境

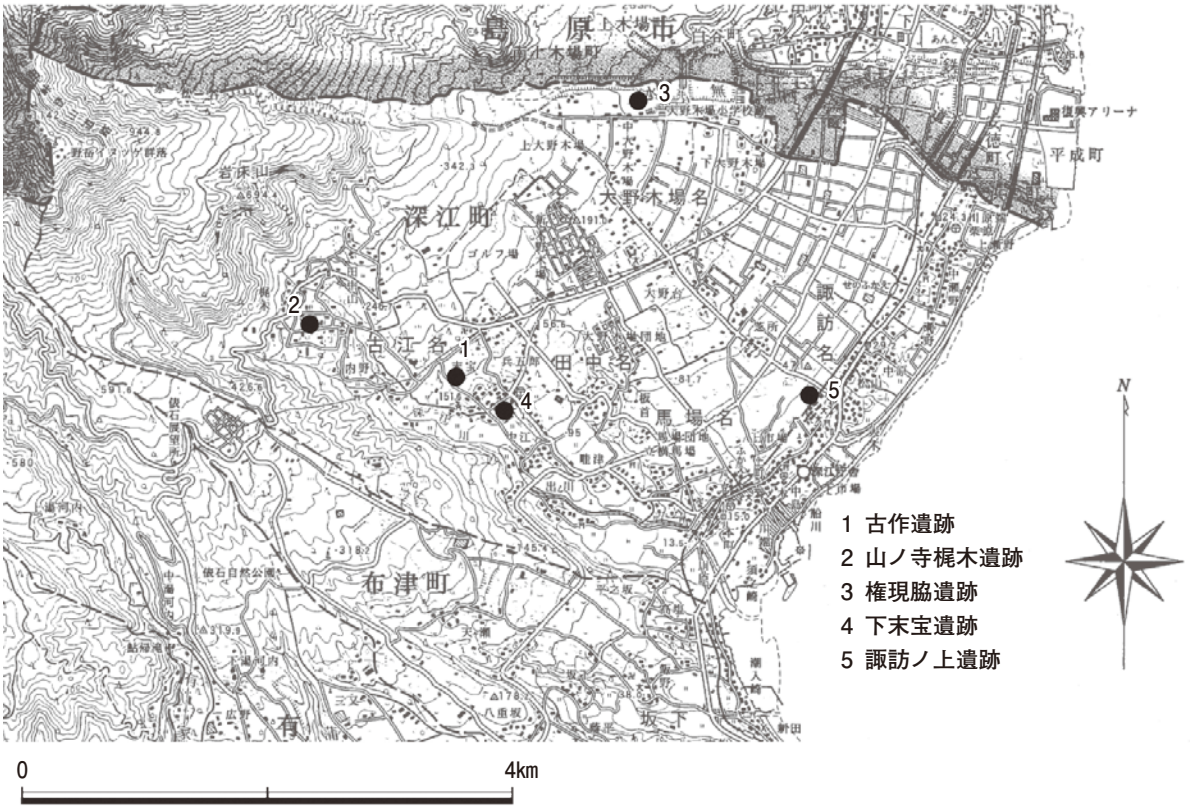
古作遺跡周辺の遺跡に目を向けると，遺跡からわずか300mほどの距離にある下末宝遺跡では，古江・田中地区圃場整備事業に伴って発掘調査が実施され，縄文時代早期の押型文土器が多数出土している。また，深江町域においては縄文時代晩期から突帯文期の遺跡が豊富である。「山ノ寺式土器」の標識遺跡である山ノ寺梶木遺跡，水無川上流の砂防工事に伴って発掘調査が実施された権現脇遺跡，諏訪地区圃場整備事業に伴って発掘調査が実施された諏訪ノ上遺跡などが知られる。

一方，およそ1万年前には雲仙の火山活動が活発であったと考えられ，噴火に起因すると考えられる土石流が発生し，その堆積物が深江町のほぼ全域を厚く覆っており，これまでのところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。また，縄文時代前・中期においても遺跡の空白期があり，普賢岳や眉山の火山活動が影響しているものと考えられる。

今回の古作遺跡の発掘調査では，眉山の噴火活動に伴うものと考えられる「権現脇火砕サージ」が確認され，さらにその下位の層から縄文時代前期の遺物がまとまって検出されたことは，深江町域での人類活動を雲仙の火山活動との関係を推察するうえで非常に意義深い。



第2図　古作遺跡の位置（S=1/200,000）



第3図　深江町の代表的な遺跡（S=1/60,000）

第Ⅲ章　試掘・範囲確認調査

第1節　調査トレンチの設定と調査の方法

路線計画の対象地において，長さ4m，幅1mの調査トレンチを任意の地点に11箇所設定し，調査を行った。トレンチ1～トレンチ3は末宝遺跡の範囲内である。

調査は，人力によって層位ごとに掘削し，掘削作業の各段階で遺構・遺物の有無を確認した。完掘したところでトレンチ壁面の土層の実測図作成および写真撮影を行った。

第2節　試掘・範囲確認調査の成果

試掘・範囲確認調査によって確認された基本層序は，以下のとおりである。

Ⅰ 層　灰褐色土　耕作土
Ⅱ 層　黒褐色土
Ⅲa層　黒色土
Ⅲb層　にぶい黄褐色土
Ⅴa層　明黄褐色土
Ⅴb層　にぶい黄褐色土
Ⅵ 層　黒色土
Ⅶ 層　にぶい黄橙色砂礫

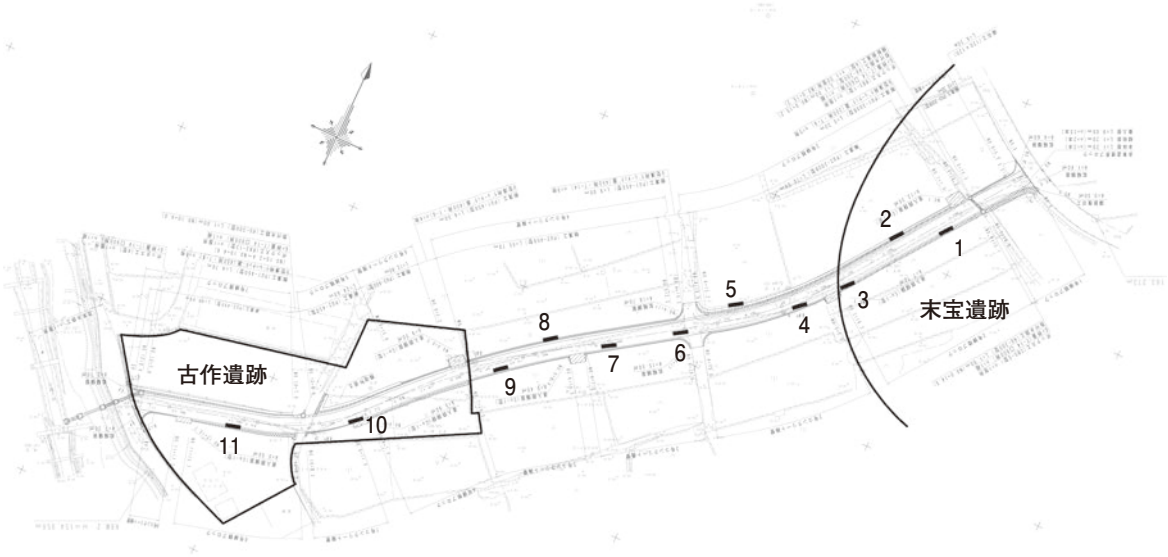
なお，本調査においては，眉山噴火活動の火山噴出物である権現脇遺跡火砕サージをⅣ層として確認したが，試掘・範囲確認調査の段階においては認識できなかった。Ⅴa層と色調的には似通っており，Ⅴa層の上位部がⅣ層であった可能性が高い。

11箇所の調査トレンチのうち，まとまった遺物の出土が見られたのはトレンチ11のみである。トレンチ11は，道路計画地の中で設定した調査トレンチの中で最も西に位置し，中の間川の左岸に立地する。Ⅴa層上面で焼土遺構を確認したが，覆土には炭化物とともに黒曜石剥片・砕片，サヌカイト砕片，土器小片を含んでいた。

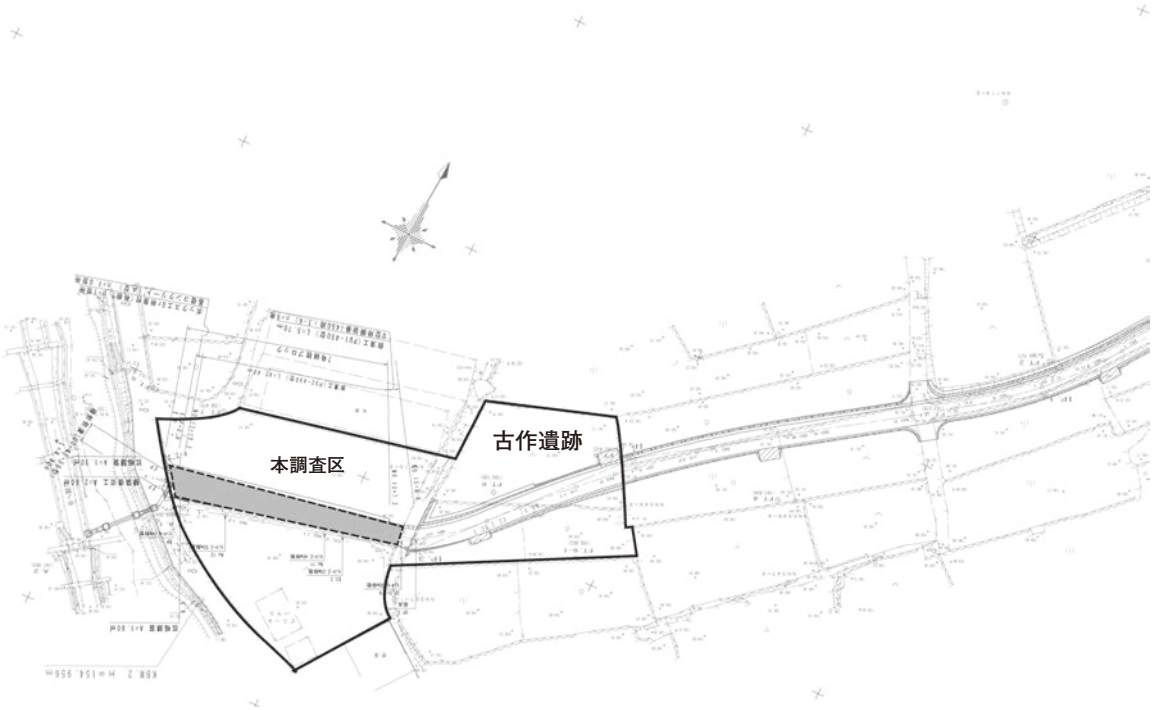
また，トレンチ10付近では，表面採集により土器片，砂岩製磨石，黒曜石剥片，サヌカイト剥片などが認められた。

以上の試掘・範囲確認調査の成果を踏まえ，古作遺跡を新規発見遺跡として登録した。遺跡の総面積は，およそ3,000㎡で，南北60m，東西100mを測る。山手である北側は果樹園及び牛舎によって，海手である南側は民家によってその範囲が限定されている。また，遺跡の西側は中の間川による浸食で深く落ち込む。今回の調査は，路線上に設けた調査トレンチと計画地周辺の表面採集のみの成果によっているため，今後古作遺跡の範囲はさらに拡張する可能性を持っている。

なお，試掘・範囲確認調査の完了後にトレンチ11付近について，北側に路線をずらす計画変更が行われたことから，本調査についても新たな路線計画に従って本調査範囲の設定を行った。

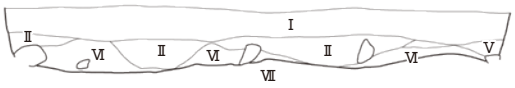


第4図　調査トレンチの配置（S=1/2,000）

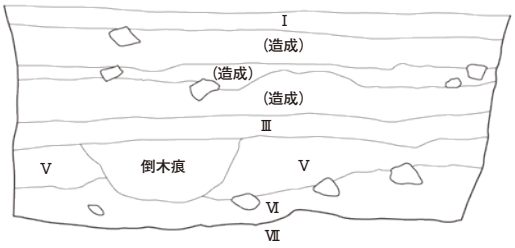


第5図　本調査区の位置（S=1/1,500）

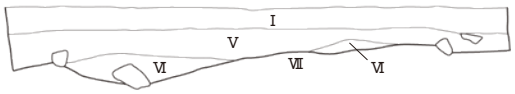
トレンチ1 北西壁



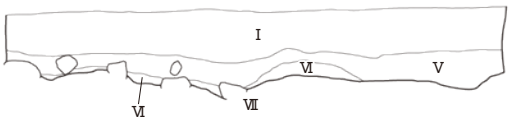
トレンチ2 北西壁



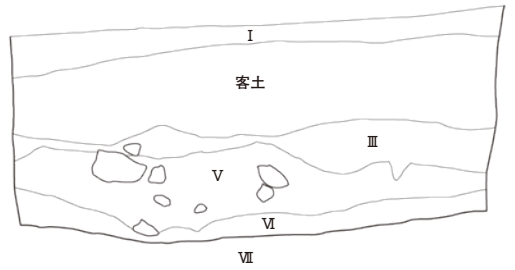
トレンチ3 北西壁



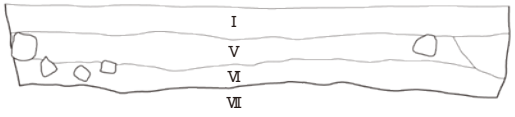
トレンチ4 北西壁



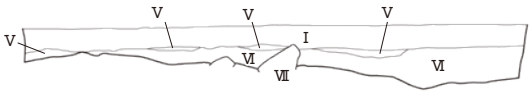
トレンチ5 北西壁



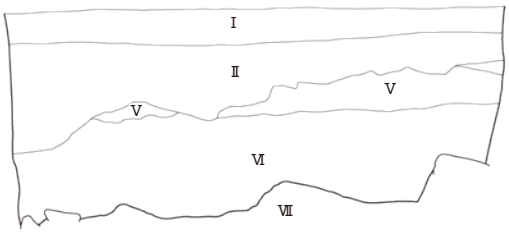
トレンチ6 北西壁



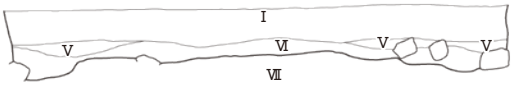
トレンチ7 北西壁



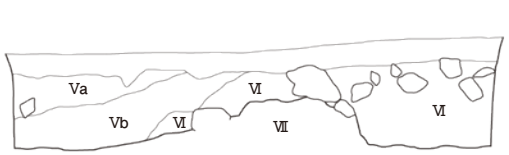
トレンチ8 北西壁



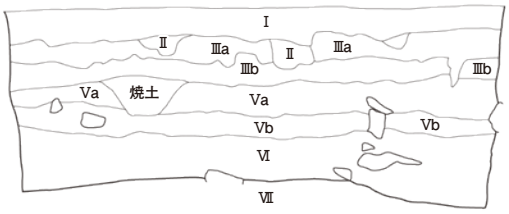
トレンチ9 北西壁



トレンチ10 北西壁



トレンチ11 北壁



第6図　調査トレンチの土層実測図（S=1/60）

第Ⅳ章　本調査

第1節　調査区の設定と調査の方法

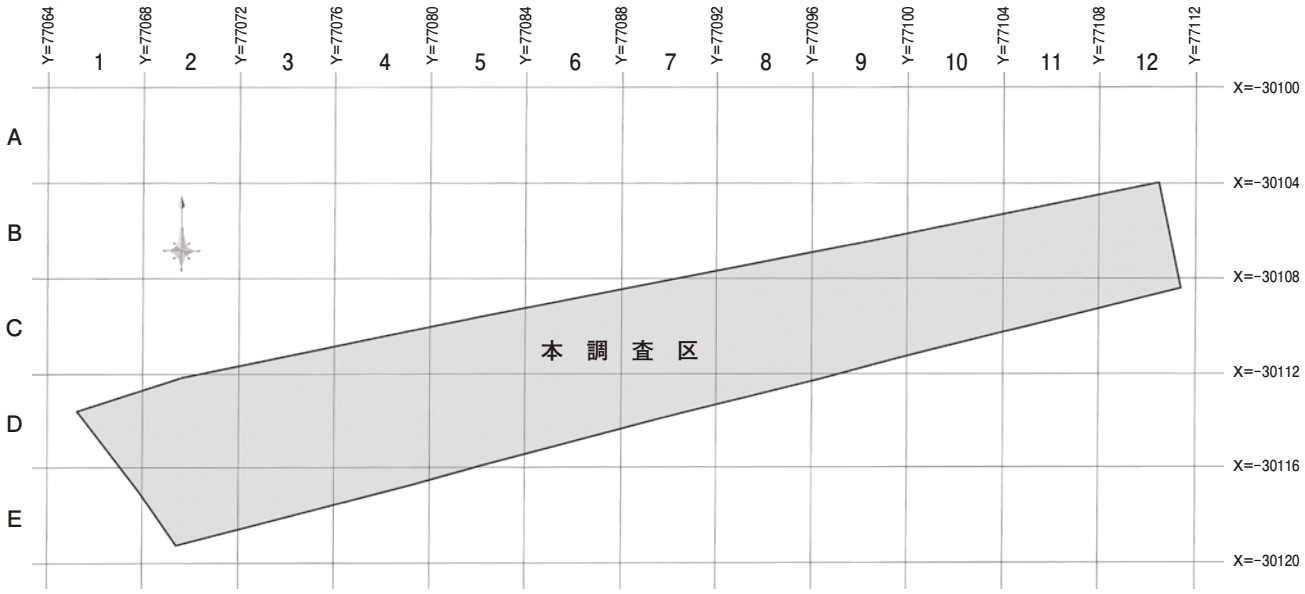
調査は，事業担当及び道路工事の施工業者立会いのもと，はじめに工事路線の最も西側となるトレンチ11の周辺において256㎡の調査区を設定した。東西方向の長軸は46m，短軸は西側で6.7m，東側で4.5mを測る。

その後，まずバックホーによる表土の掘削を行い，調査グリッドの設定を行った。世界測地系に則って座標原点をX=－30,100，Y=77,064にとり，南北方向及び東西方向に軸を設定して4m間隔の調査グリッドを組んだ。

遺物包含層の掘削は，人力により行い，主要な遺物包含層においては遺物の出土地点の座標を観測し，記録した。また，層位ごとの掘削作業の各段階で遺構の検出作業を行い，必要に応じて遺構実測図を作成した。

2，5，8，11の各グリッドにおいては，東壁を土層観察用のベルトとして設定し，ベルトを残しながら掘削作業を進めた。最終的には土層観察用の各ベルトと調査区北壁の土層実測図の作成を行った。

写真撮影については，遺構の検出状況や完掘状況，遺物の検出状況，土層の堆積状況などを随時記録し，すべての掘削作業が完了した段階でラジコンヘリによって航空写真を撮影した。



第7図　本調査区のグリッド設定（S=1/300）

第2節　本調査の成果

⑴　層位

本調査によって確認された基本層序は，以下のとおりである。

Ⅰ 層　褐灰色土　耕作土
Ⅱ 層　黒褐色土
Ⅲa層　黒色土
Ⅲb層　にぶい黄褐色土（遺物包含層）
Ⅳ 層　明黄褐色火山噴出物（権現脇火砕サージ）
Ⅴa層　明黄褐色土（遺物包含層）
Ⅴb層　にぶい黄褐色土（遺物包含層）
Ⅵ 層　黒色土
Ⅶ 層　にぶい黄橙色砂礫

基本的な層序関係は，平成16年度に旧深江町教育委員会によって調査が実施された近隣遺跡の下末宝遺跡や近年南島原市教育委員会によって継続的に調査を実施している権現脇遺跡との並行関係も認められ，雲仙普賢岳東麓地域における基本層序も整いつつある状況といえる。特に本調査においては，Ⅳ層とした明黄褐色の無遺物層が確認され，権現脇遺跡周辺で検出される権現脇火砕サージと同一起源の火山噴出物を含むものと判断された。このことは，雲仙眉山の噴火活動の様相とそれによって影響を受けた山麓地帯における人類活動を考えるうえで，重要な成果といえる。

⑵　遺構

Ⅲb層上面において，中世から近世にかけての時期のものとみられる溝5条，土坑1基を確認した。遺構内遺物が貧弱であるため，時期の明確な比定はできないが，堆積状況が似通う溝5条はほぼ同時期で，近世まで時期が下る可能性がある。土坑については，溝3に先行する時期のものである。

溝1

東西方向に途中途切れるが，約12mの長さがある。幅は40～60cm，深さは約10㎝を測る。

溝2

溝1に沿うように平行して掘り込まれており，西側は南西へと曲がる。全長約9m，幅は40～75cm，深さは深いところで15cmを測る。

溝3

調査区中央を横断するように東西に走り，溝1・溝2と平行して16mの長さがある。50～80cmの幅で，深さは15～20㎝である。

溝4

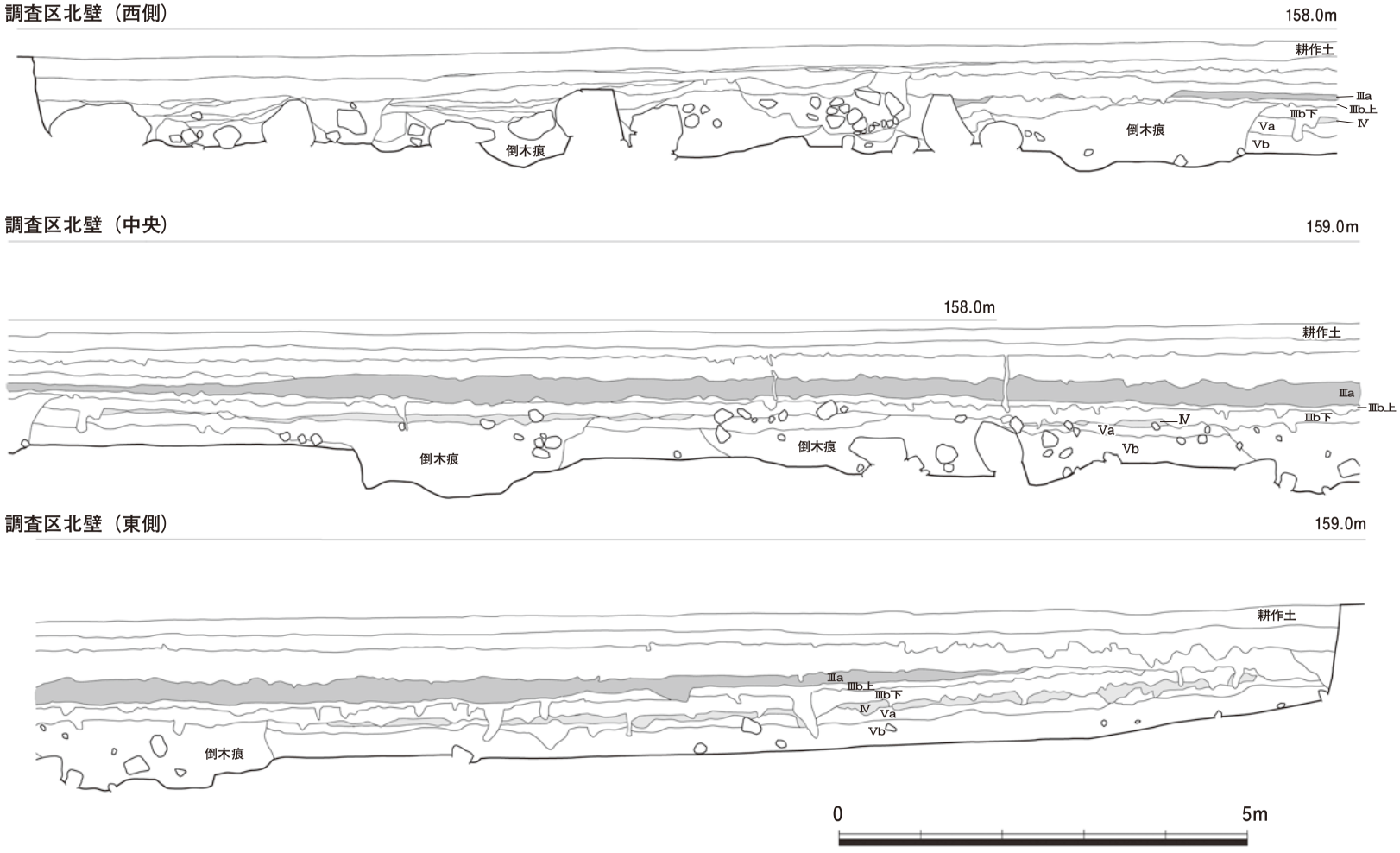
4.3mの長さがあり，しっかりとした掘り込みで，幅は約70cm，深さは25㎝を測る。

溝5

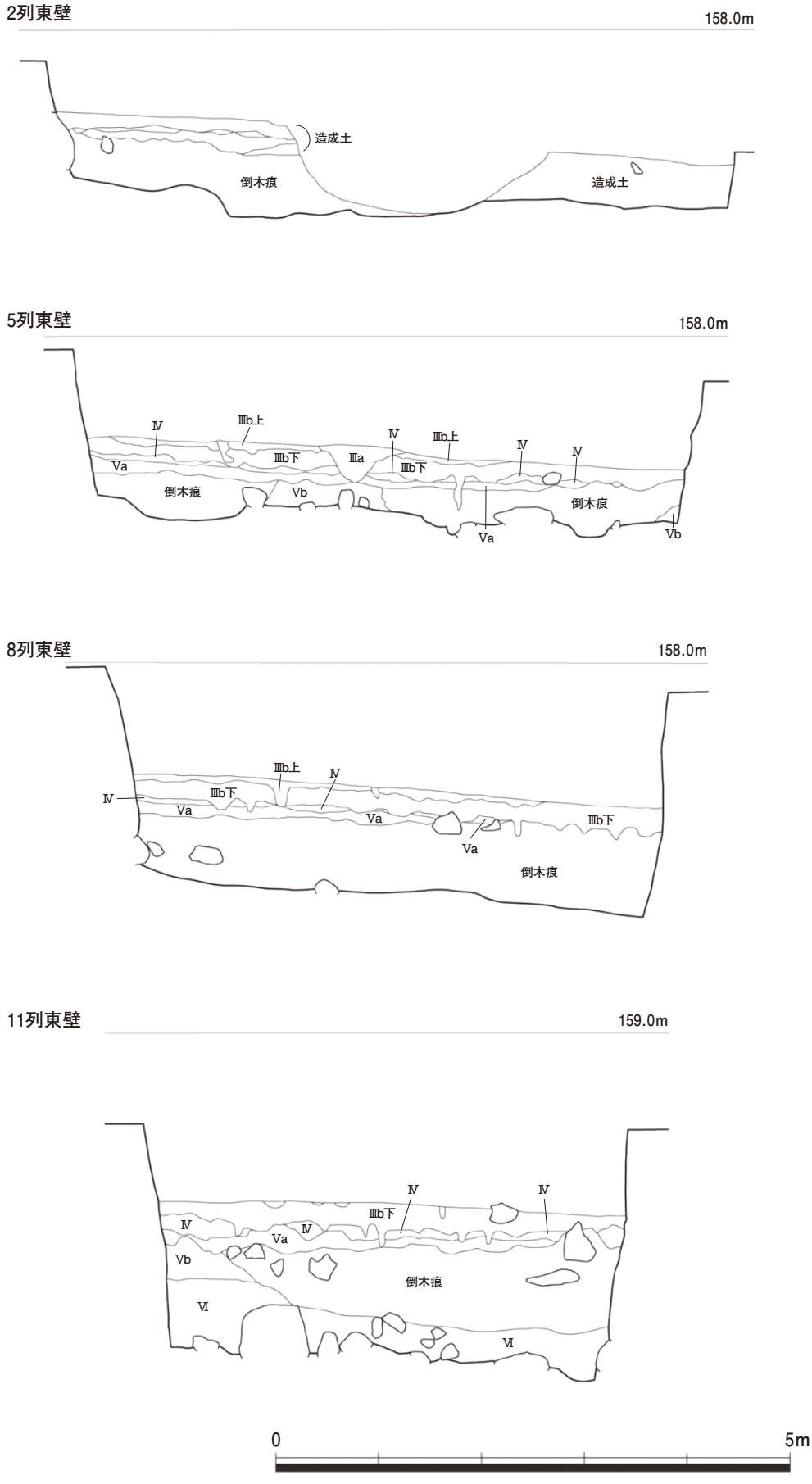
溝1～4とは軸が直交する関係にあり，北から南へと延びて途中から東へと大きく曲がって調査区外へと続く。検出された長さは約9mで，幅は20～60cm，深さは10㎝である。

土坑

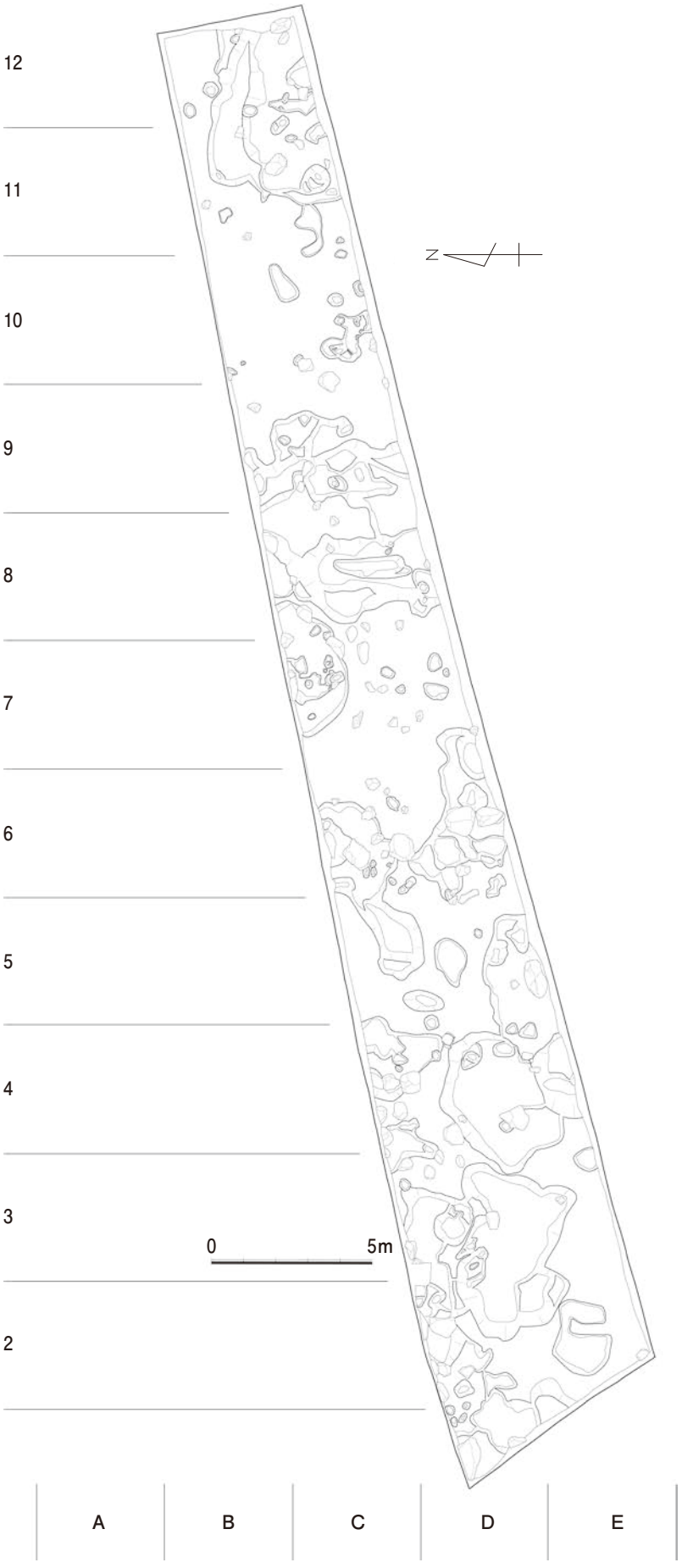
平面隅丸方形を呈し，東西2.4m，南北2.1m，深さ15cmを測る。床面には焼土が確認でき，それを覆うように炭化物層が検出された。



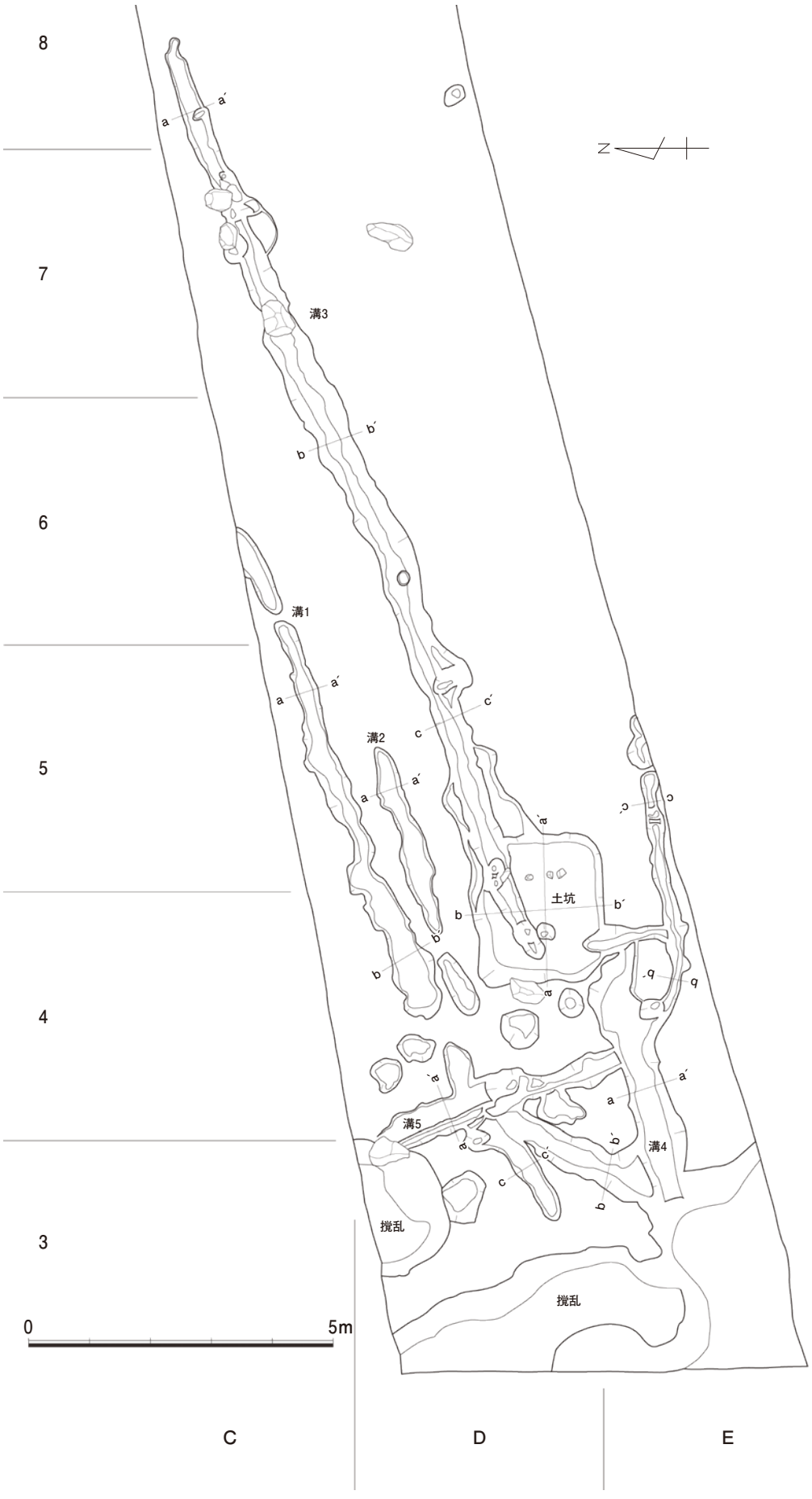
第8図　本調査区の土層実測図①（S=1/80）



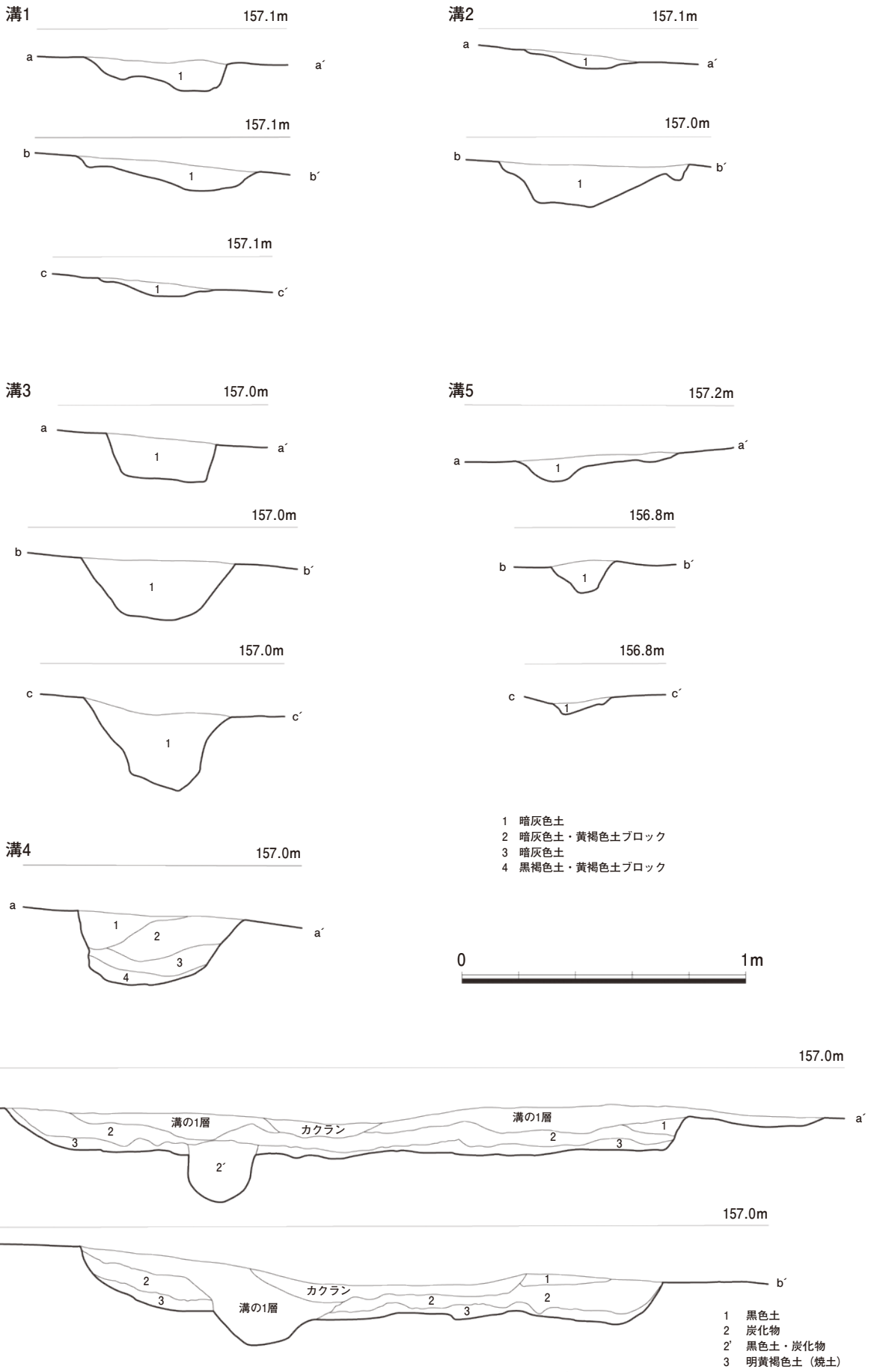
第9図　本調査区の土層実測図②（S=1/60）



第10図　本調査区のⅥ層上面遺構実測図（S=1/200）



第11図　本調査区のⅢb層上面遺構実測図（S=1/100）



第12図　溝・土坑の土層実測図（S=1/20）

⑶ 遺物

土器

古作遺跡において出土した土器群は，縄文時代早・前期のものと縄文時代後・晩期のものとに大別でき，わずかに中世のものが含まれる。若干の攪乱はみられるが，無遺物層であるⅣ層を境界として，上位が縄文時代後・晩期のもの，下位が縄文時代早・前期のものとしておおよそ層位的に分離が可能である。

以下の通り分類して報告する。

土器1群　縄文時代早・前期の土器群

A類　厚手の器壁をもつ無文土器

B類　一野式土器

C類　押型文土器

D類　妙見・天道ヶ尾式土器

E類　塞ノ神式土器

F類　薄手の器壁で口唇部に刻目をもつ土器

G類　轟式土器

土器2群　縄文時代後・晩期の土器群

土器3群　その他の土器群

土器1群（第13図～第15図）

A類（1・2）

1は深鉢の胴部下半の資料と思われ，器壁は1.4㎝と厚手である。**2**は底部の資料で，復元底径10.6㎝を測る。

B類（3～12）

3～7は口縁部，**8～12**は胴部の資料である。口縁部の資料はいずれも口唇部をナデ調整によって丸く仕上げる特徴がある。貝殻条痕文は基本横方向の施文によるものだが，**4～6**は縦方向施文ののち横方向施文を行っている。また，**7**については横方向の施文を上下させることで波状の文様をつける。

C類（13～17）

13は粒の大きい円文，**14**は連珠文，**15～17**は山形文の資料である。**17**は復元底径8.5㎝を測る底部の資料で，平底をなし，開いて立ち上がる器壁には細かい山形文を施す。

D類（18）

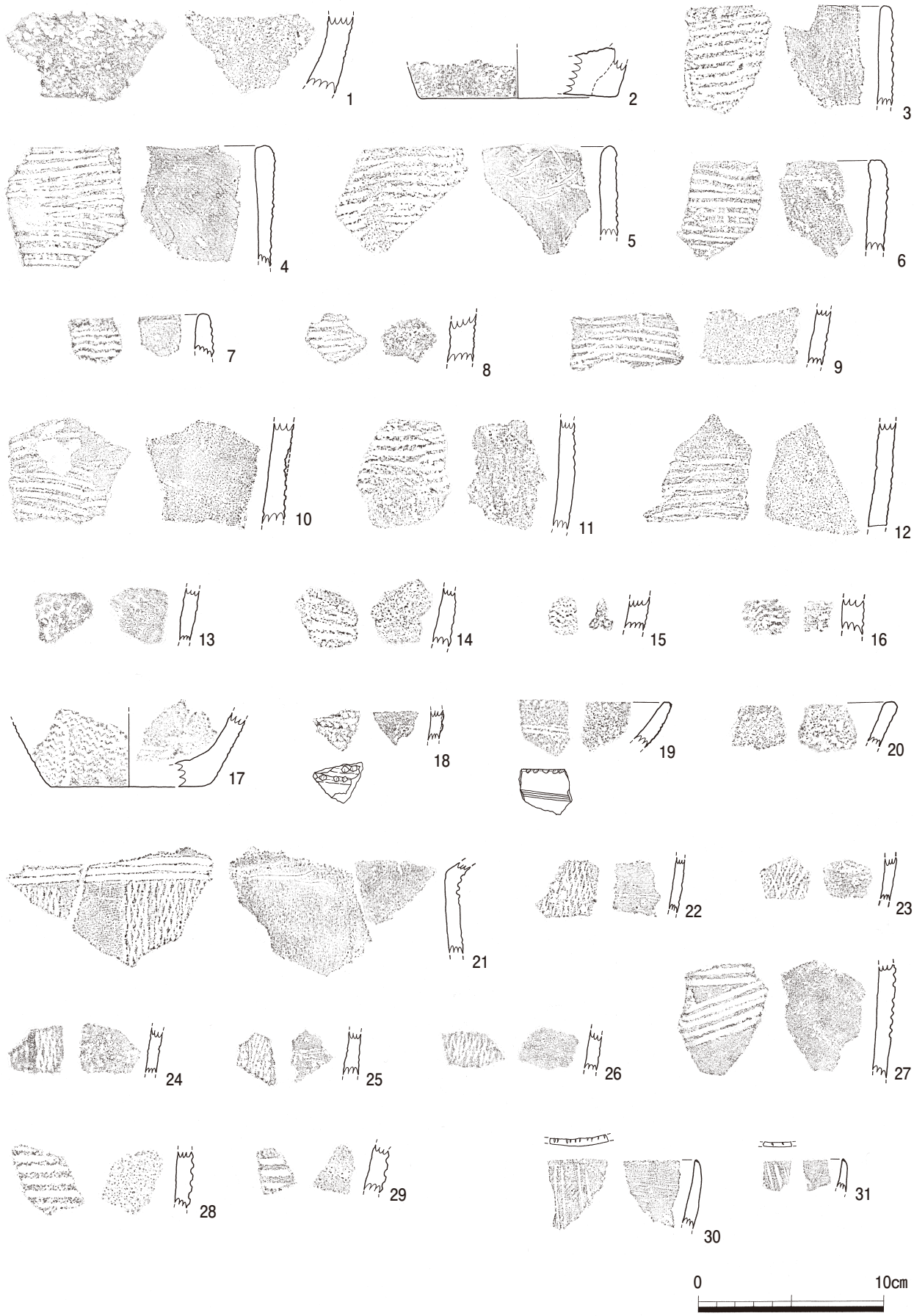
18は薄い器壁で，外面に刻目を入れた突帯2条をもつ。

E類（19～29）

19は大きく開く口縁部の資料で，外面に沈線文，口唇部に刻目を施す。**21**は胴部上半の資料で，縦方向の撚糸文と3条からなる横方向の沈線文が認められる。**22～26**は撚糸文，**27～29**は沈線文の資料である。

F類（30・31）

30・31は薄手の器壁で，口縁部は先細りの断面をなし，口唇部に刻目を施している。

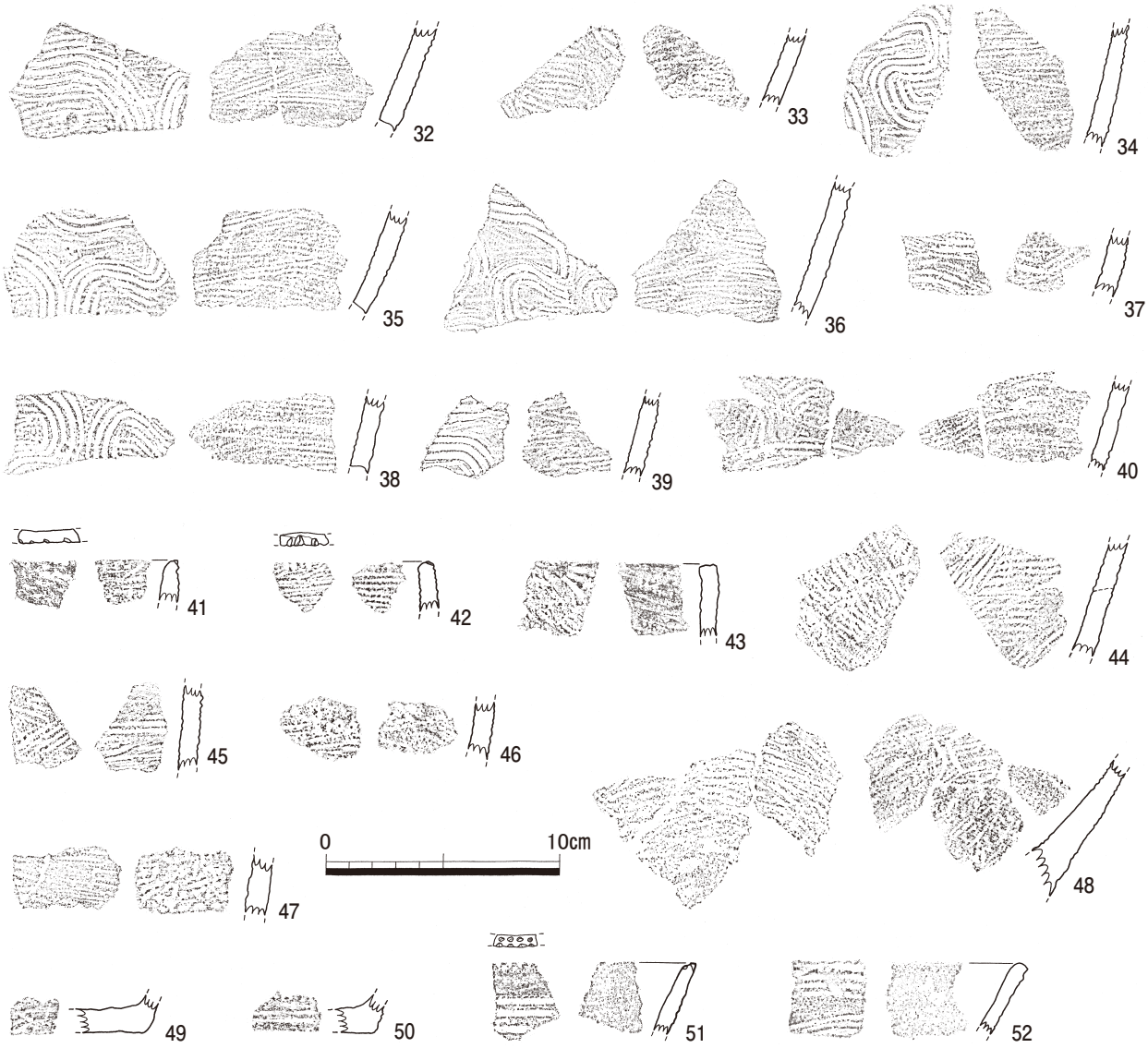


第13図　縄文時代早・前期の土器①（S=1/3）

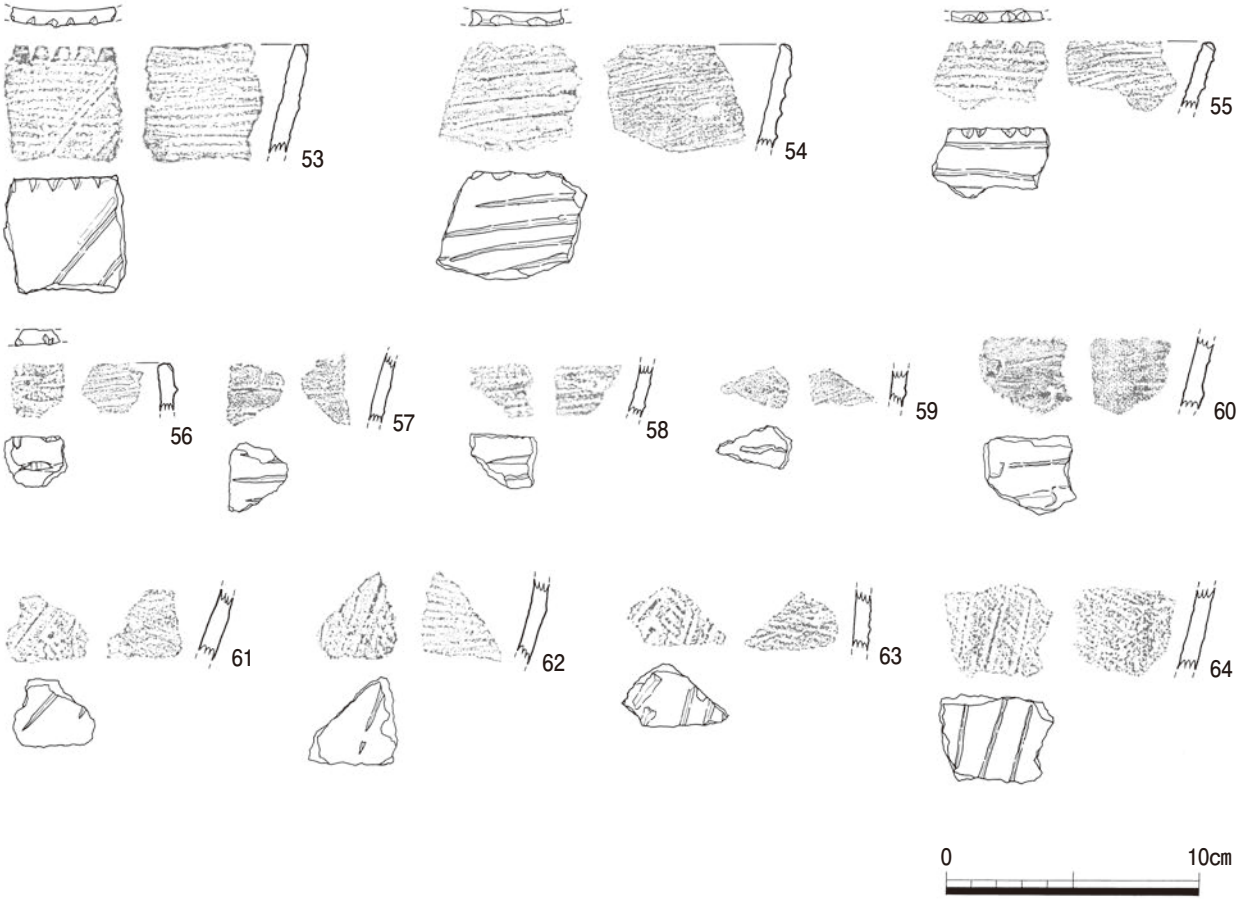
G類（32〜64）

条痕文を外面に施す土器類である。内面についても条痕調整をとどめるものが多く認められる。文様効果をねらってうねらせるように条痕文を施すもの（**Ga類32〜40**），条痕文を地文として施すもの（**Gb類41〜52**），条痕文を地文としていわゆる「ミミズバレ」状の隆帯文を施すもの（**Gc類53〜64**），の3類に細分が可能である。

32〜40はいずれも胴部の資料であるが，外面に流水文状に条痕文を施している。**41〜43**は口縁部の資料である。**41・42**は口唇部外端に刻みを施しており，**43**は口唇部を上部からなでることにより平坦に仕上げている。**49・50**は底部の資料である。どちらも小片であるが，平底になるものと考えられる。**51・52**はどちらも大きく開く口縁部の資料である。**32〜50**に比べると器壁の色調は明るく，趣が異なる印象を受ける。**51**は口唇部の外端に刻目を，上部に刺突列点を施している。**53〜64**は器壁外面に隆帯文をもつものであるが，隆帯文は条痕文の上に施されており，数本単位で平行に配されている。縦方向，斜方向，水平方向が認められる。口縁部の資料である**53〜56**は，口唇部に刻目を施す。



第14図　縄文時代早・前期の土器②（S=1/3）



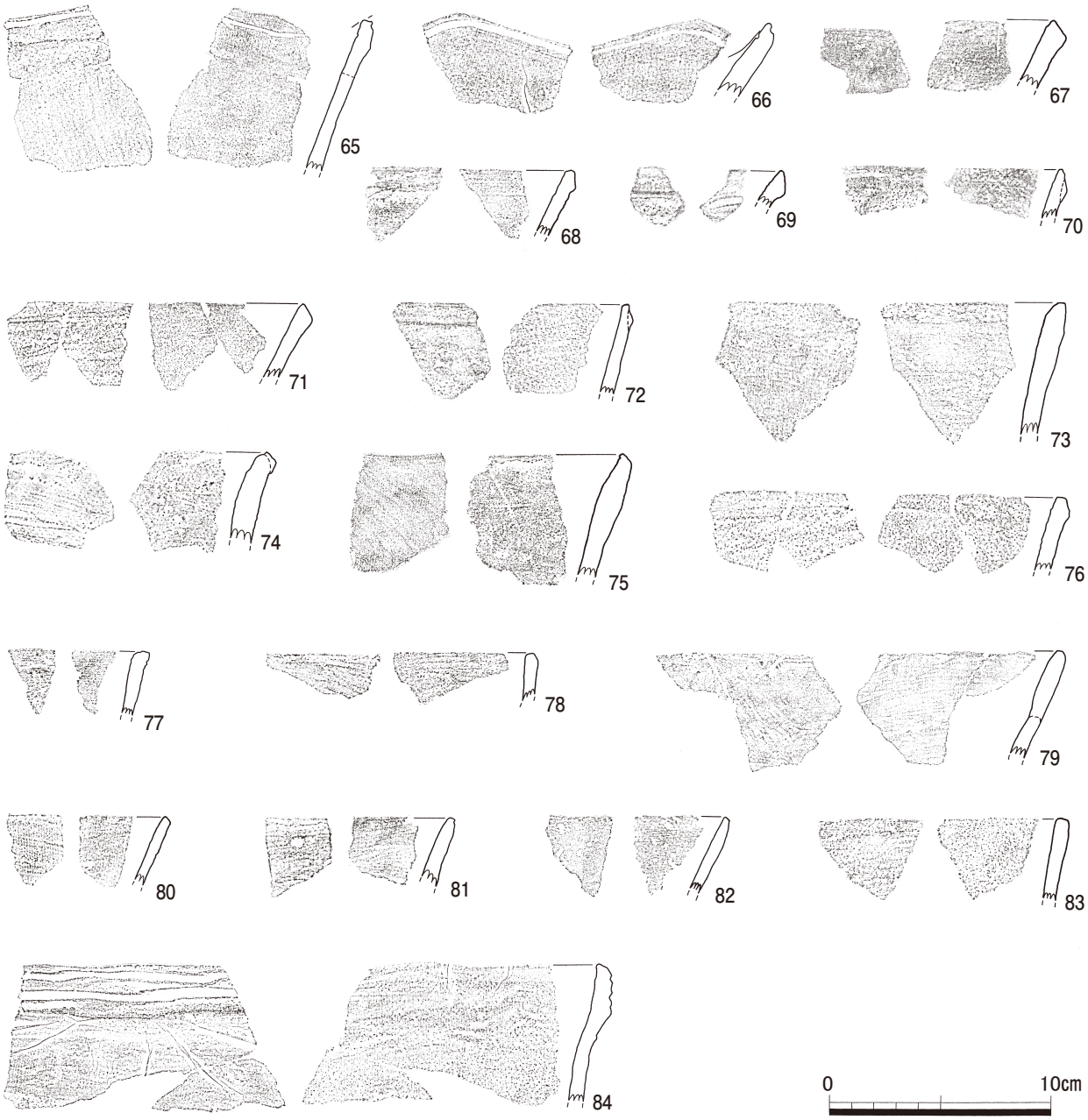
第15図　縄文時代早・前期の土器③（S=1/3）

土器2群（第16図～第18図，第19図118～137）

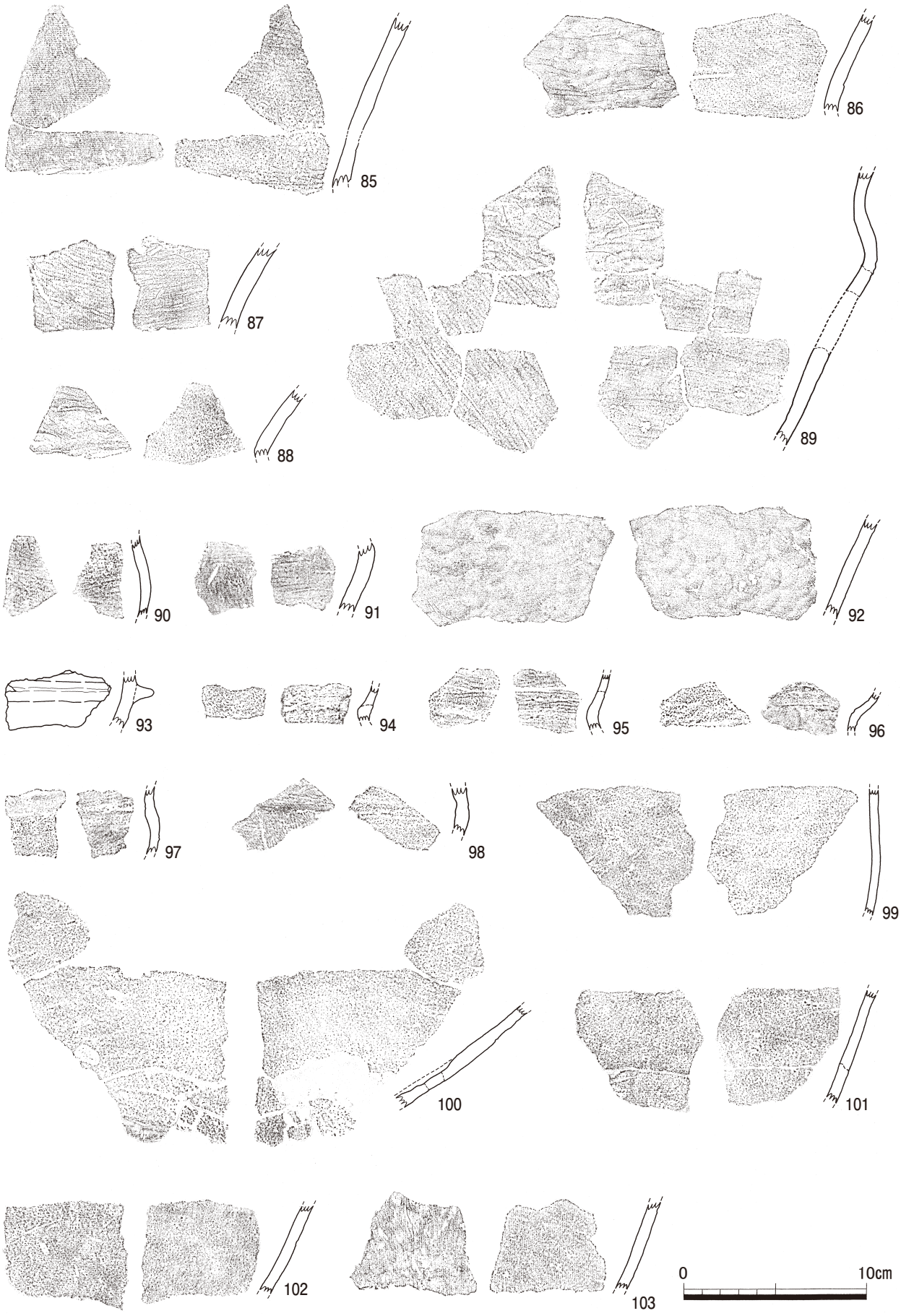
基本的には縄文時代後期に位置づけられるものがほとんどだが，若干縄文時代晩期の資料を含むものと思われる。65～117が鉢，深鉢の資料，118～136が浅鉢の資料，137が土製品の資料である。

65・66は口縁部が波状をなし，口唇部の内外に沈線を1条ずつ引く。67～71，76の口縁部資料は，外側を肥厚させている。75は大きく開く口縁部で，内外面ともによく研磨調整を施している。84は外反する頸部に直立する口縁部がつく資料で，口縁部には2条の沈線文が施されている。

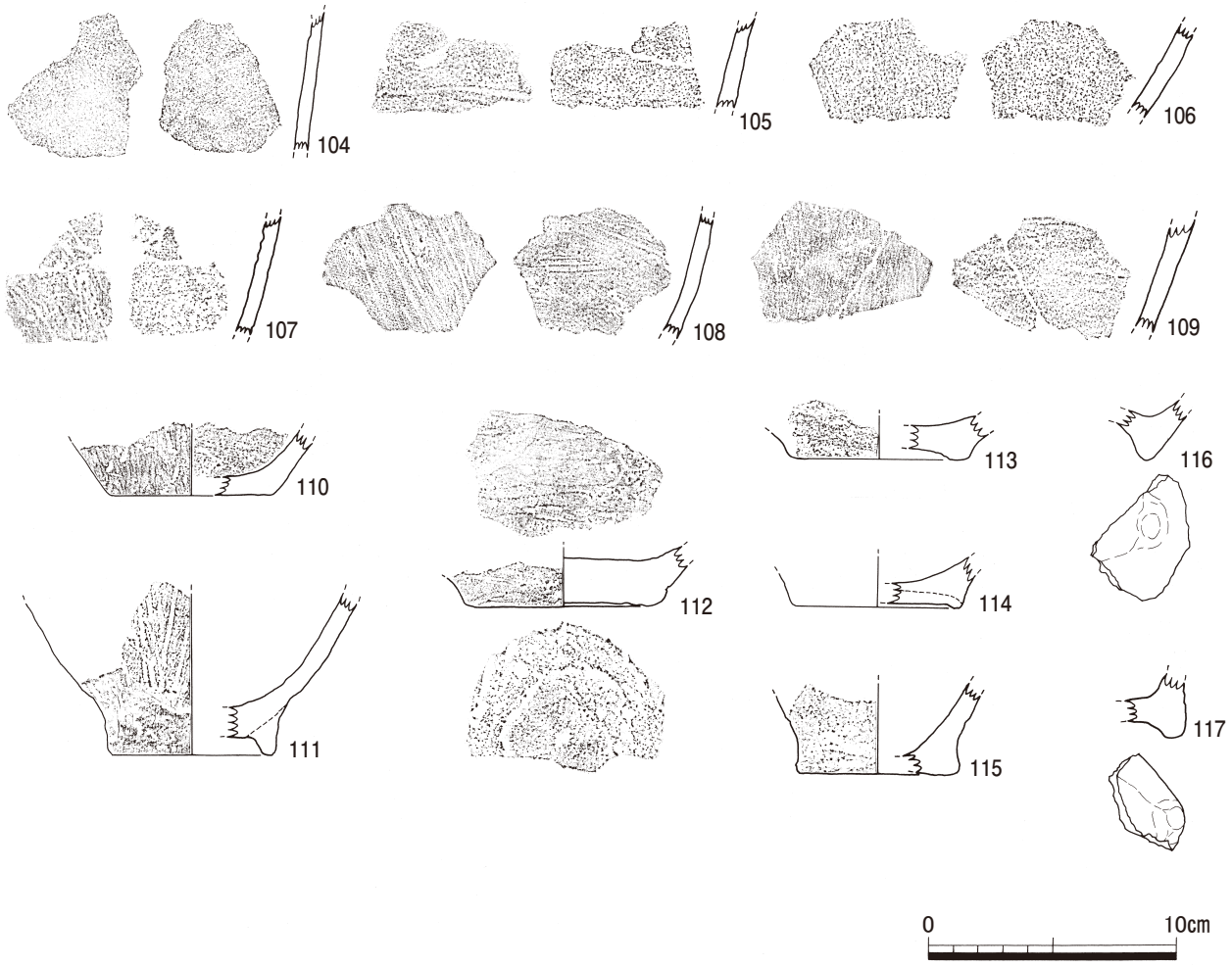
89は深鉢の胴屈曲部の資料で，内外面ともに研磨調整を施している。93は鍔状の幅広の突帯を貼り付ける。110は平底の底部で，復元底径6.5cmを測る。外面は縦方向によく磨かれている。111は復元底径6.5cmを測る小振りの深鉢底部で，上げ底をなす。外面は縦方向の貝殻条痕調整が残る。112は底径8.0cmであるが，底径を大きくするために粘土紐をリング状に張り付けた痕跡が残る。また，内面には指先によって粘土をなで取った痕跡が残る。116・117は三足土器の脚部である。



第16図　縄文時代後・晩期の土器①（S=1/3）



第17図　縄文時代後・晩期の土器②（S=1/3）

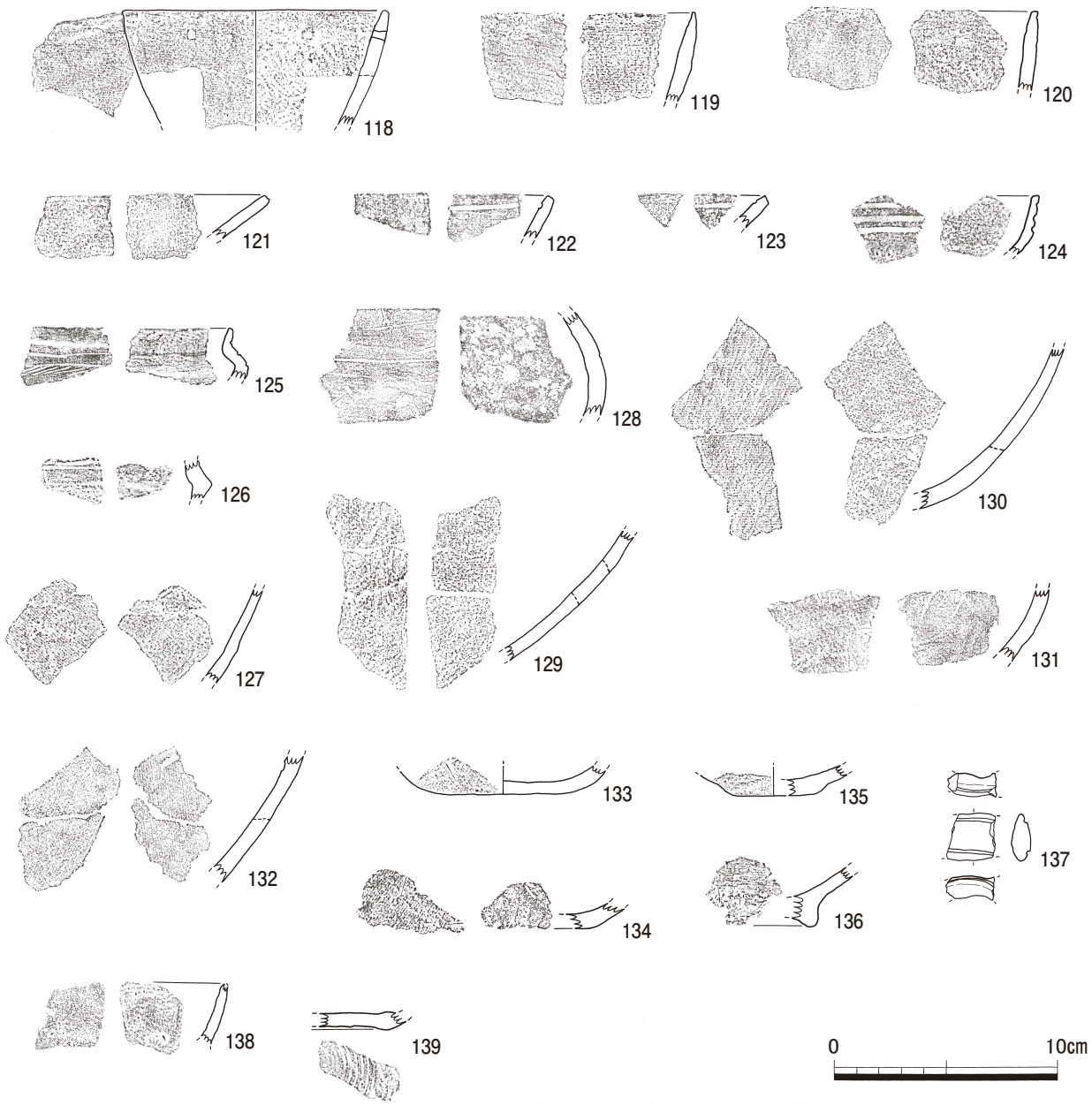


第18図　縄文時代後・晩期の土器③（S=1/3）

118は復元口径11.9cmを測り，口縁部に焼成前の穿孔をもつ。122・123は口縁部内面に沈線を引く。124は口縁部文様帯に3条の沈線を引く。125は屈曲する胴部に連続する短い斜沈線を引き，肩部には3条の沈線を横方向に引いて，口縁部を立ち上げる。133・134は丸底の資料，136は上げ底の資料である。137は土製品で外面に2条の沈線を引くが，全体の形状は不明である。

土器3群（第19図138・139）

138・139は中世の土師皿である。139は底面に糸切りの痕を残す。



第19図　縄文時代後・晩期の土器④・その他の土器（S=1/3）

第1表　土器観察表①

図	番号	取上番号	層位	グリッド	群類	文様・調整		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
	1	FTR0537	Va	D6	1群A類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色・黄灰色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
	2	FTR0891	Vb	B11	1群A類	擦過	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	3	FTR0855	Vb	B12	1群B類	貝殻条痕	ナデ	褐灰色・にぶい黄橙色	褐灰色	角閃石・長石・石英	外面に炭化物
	4	FTR0854	Vb	B12	1群B類	貝殻条痕	ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	5	FTR0892	Vb	B12	1群B類	貝殻条痕	ナデ	灰褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英・白色粒子	外面に炭化物
	6	FTR0842	Vb	B11	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	7	—	廃土	—	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい橙色	橙色	角閃石・長石・石英	
	8	FTR0843	Vb	B11	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	9	—	廃土	—	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	10	FTR0841	Vb	B11	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	11	FTR0853	Vb	B12	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色・橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	12	FTR0833	Vb	B11	1群B類	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色・褐灰色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	13	FTR0697	Va	C10	1群C類	押型文(円)	ナデ	にぶい黄橙色	黄褐色	角閃石・長石・石英	
	14	FTR0686	Va	C10	1群C類	押型文(連珠)	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	15	FTR0820	Vb	C10	1群C類	押型文(山形)	ナデ	にぶい橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
13	16	FTR0827	Vb	C10	1群C類	押型文(山形)	ナデ	橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
	17	—	—	—	1群C類	押型文(山形)	ナデ	橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	18	FTR0817	Vb	C10	1群D類	刻目突帯	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	19	FTR0372	Ⅲb下	C4	1群E類	沈線・ナデ	ナデ	橙色	橙色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	20	FTR0818	Vb	C10	1群E類	ナデ	ナデ	浅黄色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	21	FTR0426・FTR0440	Va	D3・C4	1群E類	沈線文・撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	22	FTR0886	Vb	B10	1群E類	撚糸文	ナデ	橙色・にぶい黄橙色	褐灰色	角閃石・長石・石英	
	23	FTR0802	Vb	D7	1群E類	撚糸文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	24	FTR0557	Va	C6	1群E類	撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	角閃石・長石・石英	
	25	FTR0413	Va	D3	1群E類	撚糸文	擦過	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	26	FTR0411	Va	D3	1群E類	撚糸文	ナデ	にぶい黄色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	27	—	表土剥ぎ後清掃	—	1群E類	沈線文	ナデ	明赤褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	28	—	Vb上面倒木痕内	—	1群E類	沈線文	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	29	FTR0453	Va	D4	1群E類	沈線文	ナデ	橙色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	30	FTR0397	Ⅲb下	D7	1群F類	貝殻条痕	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	31	FTR0616	Va	C7	1群F類	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	32	FTR0563・FTR0593 FTR0594	Va	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英	
	33	FTR0519	Va	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	暗灰黄色	角閃石・長石・石英	
	34	FTR0542	Va	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	35	FTR0591	Va	D6	1群Ga類	条痕文	条痕文	橙色・にぶい赤褐色	にぶい黄橙色・暗灰黄色	角閃石・長石・石英	
	36	FTR0562	Va	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英	
	37	FTR0518	Va	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	灰色	角閃石・長石・石英	
	38	FTR0773	Vb	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英	
	39	FTR0558	Va	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	灰褐色・褐灰色	黄褐色・灰色	角閃石・長石・石英	
14	40	FTR0392・FTR0520	Va・Ⅲb下	C6	1群Ga類	条痕文	条痕文	にぶい赤褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英	
	41	FTR0511	Va	C6	1群Gb類	条痕文	条痕文	褐灰色	褐灰色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部刻目
	42	FTR0631	Va	D7	1群Gb類	条痕文	条痕文	褐灰色	褐灰色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	43	FTR0771	Vb	C6	1群Gb類	条痕文	条痕文	橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	44	FTR0877・FTR0903	Vb	C5	1群Gb類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	にぶい黄橙色・黄灰色	角閃石・長石・石英	
	45	FTR0860	Vb	C6	1群Gb類	条痕文	条痕文	にぶい褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	46	FTR0555	Va	C7	1群Gb類	条痕文	条痕文	明赤褐色	にぶい褐色・黄灰色	角閃石・長石・石英	
	47	FTR0637・FTR0656	Va	C7	1群Gb類	条痕文	—	褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英	

第2表　土器観察表②

図	番号	取上番号	層位	グリッド	群類	文様・調整		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
14	48	FTR0523・FTR0533 FTR0541・FTR0772	Va・Vb	C6・D6	1群Gb類	条痕文	条痕文	にぶい赤褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英	
	49	FTR0583	Va	C7	1群Gb類	条痕文	ナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	50	FTR0627	Va	C7	1群Gb類	条痕文	ナデ	にぶい橙色	黄灰色	長石・石英・赤色粒子	
	51	—	—	—	1群Gb類	条痕文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目・列点
	52	—	Vb上面倒木痕内	—	1群Gb類	条痕文	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
15	53	FTR0569	Va	C6	1群Gc類	条痕文・隆帯文	条痕文	黄灰色・橙色	黄灰色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	54	FTR0504	Va	C5	1群Gc類	隆帯文	条痕文	明赤褐色・褐灰色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	55	FTR0622	Va	C7	1群Gc類	条痕文・隆帯文	条痕文	灰黄褐色・褐灰色	灰黄褐色・褐灰色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	56	FTR0565	Va	C6	1群Gc類	条痕文・隆帯文	条痕文	にぶい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英	口唇部刻目
	57	FTR0491	Va	C5	1群Gc類	隆帯文	条痕文	黄灰色	黄灰色	長石・石英	
	58	FTR0484	Va	D5	1群Gc類	隆帯文	ナデ	にぶい黄褐色・褐灰色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	59	FTR0495	Va	C5	1群Gc類	隆帯文	条痕文	にぶい褐色	褐灰色	長石・石英	
	60	FTR0743	Vb	D5	1群Gc類	隆帯文	条痕文	にぶい黄橙色・橙色	にぶい黄橙色	長石・石英	
	61	—	Vb上面倒木痕内	—	1群Gc類	隆帯文	ナデ	明赤褐色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	62	—	Vb上面倒木痕内	—	1群Gc類	条痕文・隆帯文	条痕文	にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	63	FTR0476	Va	C5	1群Gc類	条痕文・隆帯文	条痕文	橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	64	FTR0755	Vb	C5	1群Gc類	隆帯文	条痕文	にぶい橙色・褐灰色	灰黄褐色	長石・石英	
16	65	FTR0210・FTR0371	Ⅲb下	C4	2群	研磨	研磨・ナデ	にぶい黄橙色・褐灰色	にぶい黄橙色・褐灰色	角閃石・長石・石英	
	66	FTR0175	Ⅲb下	C5	2群	研磨	研磨	灰黄色	浅黄色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	67	FTR0338	Ⅲb下	C10	2群	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	68	FTR0105	Ⅲb下	D5	2群	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	69	FTR0291	Ⅲb下	D7	2群	研磨	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	70	FTR0115	Ⅲb下	D5	2群	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
	71	FTR0310・FTR0313	Ⅲb下	C8	2群	ナデ	ナデ	浅黄橙色・黄灰色	浅黄色・黄灰色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	72	—	表土剥ぎ後清掃	—	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	73	FTR0260	Ⅲb下	D7	2群	ナデ	ナデ	灰黄色	灰黄色	角閃石・長石・石英	
	74	FTR0337	Ⅲb下	C10	2群	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	75	FTR0402	Ⅲb下	C4	2群	研磨	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	76	FTR0019・FTR0031	Ⅲb上	C7・C8	2群	ナデ	ナデ	灰白色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	77	FTR0618	Va	C7	2群	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙色	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	
	78	FTR0033	Ⅲb上	D5	2群	研磨	ナデ	にぶい黄橙色	黄灰色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	79	FTR0092・FTR0095	Ⅲb下	C4・D4	2群	研磨	研磨	灰黄色・浅黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	80	FTR0069	Ⅲb下	D4	2群	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	81	FTR0390	Ⅲb下	C4	2群	研磨	研磨	灰黄色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	82	FTR0052	Ⅲb上	C6	2群	研磨	研磨	にぶい橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	83	—	表土剥ぎ後清掃	—	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	84	FTR0352・FTR0354	Ⅲb下	B11	2群	沈線文・研磨	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
17	85	FTR0335・FTR0336	Ⅲb下	C10	2群	研磨	研磨	灰黄褐色・黄灰色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	86	FTR0270	Ⅲb下	C7	2群	研磨	研磨	灰黄褐色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	87	FTR0360	Ⅲb下	B9	2群	研磨	研磨	にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・白色粒子	
	88	FTR0093	Ⅲb下	C4	2群	研磨	ナデ	にぶい黄色	浅黄色	角閃石・長石・石英	
	89	FTR0056・FTR0058 FTR0077・FTR0104	Ⅲb下	D3・E4	2群	研磨	研磨	橙色・灰白色・明黄褐色	橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・白色粒子	
	90	FTR0384	Ⅲb下	D5	2群	研磨	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	91	FTR0308	Ⅲb下	C8	2群	研磨	研磨	にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・白色粒子	
	92	FTR0316	Ⅲb下	C8	2群	研磨	研磨	橙色・褐灰色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	93	FTR0254	Ⅲb下	D6	2群	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色・黒褐色	にぶい赤褐色・暗褐色	角閃石・石英	

第3表　土器観察表③

図	番号	取上番号	層位	グリッド	群類	文様・調整		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
17	94	FTR0244	Ⅲb下	C6	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	95	FTR0176・FTR0204	Ⅲb下	C5	2群	研磨	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色・褐灰色	角閃石・長石・石英	
	96	FTR0866	Ⅲb下	D7	2群	ナデ	擦過	灰褐色・褐灰色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	97	FTR0013	Ⅲb上	C8	2群	研磨	ナデ	黄橙色	にぶい黄橙色・橙色	角閃石・長石・石英	
	98	FTR0003	Ⅲb上	C10	2群	擦過・研磨	ナデ	橙色	橙色	角閃石・長石・石英	
	99	FTR0222	Ⅲb下	C5	2群	ナデ	ナデ	橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
	100	FTR0156・FTR0249	Ⅲb下	D5・C6	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	浅黄色	角閃石・長石・石英	
	101	FTR0044・FTR0183	Ⅲb上・Ⅲb下	C5	2群	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄色	角閃石・長石・石英	
	102	FTR0245	Ⅲb下	C6	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰白色	角閃石・長石・石英	
	103	FTR0086	Ⅲb下	C4	2群	研磨	研磨	橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
18	104	FTR0251	Ⅲb下	D6	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	105	FTR0029・FTR0900	Ⅲb上・Ⅲb下	D6・C5	2群	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	106	FTR0172	Ⅲb下	C5	2群	ナデ	ナデ	浅黄橙色	灰黄色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	107	FTR0030・FTR0171 FTR0897	Ⅲb上・Ⅲb下	C6・C5	2群	ナデ	ナデ	橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
	108	FTR0547	Va	D6	2群	貝殻条痕	ナデ	橙色・にぶい黄橙色	橙色・にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	109	FTR0399	Ⅲb下	C10	2群	擦過・ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	110	—	Ⅲb上面根穴	D5	2群	研磨	ナデ	橙色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	111	FTR0299・FTR0300	Ⅲb下	D7	2群	貝殻条痕	擦過・ナデ	にぶい黄橙色・にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	112	FTR0072	Ⅲb下	D4	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色・にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	113	—	表土剥ぎ後清掃	—	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	114	FTR0400	Ⅲb下	C5	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	115	FTR0133	Ⅲb下	C5	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	116	FTR0419	Va	E4	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	117	—	㋑	—	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
19	118	FTR0169・FTR0180 FTR0182・FTR0389	Ⅲb下	C5	2群	研磨	ナデ	灰黄色・黄灰色	浅黄色	角閃石・長石・石英・白色粒子	焼成前穿孔
	119	FTR0129	Ⅲb下	C4	2群	研磨	研磨	灰黄褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英・白色粒子・雲母	
	120	FTR0744	Vb	D5	2群	研磨	研磨	にぶい黄橙色・褐灰色	灰黄色・橙色	角閃石・長石・白色粒子	
	121	FTR0734	Vb	D4	2群	研磨	研磨	にぶい褐色・黒褐色	にぶい褐色・黒褐色	角閃石・長石・石英	
	122	FTR0179	Ⅲb下	C5	2群	研磨	研磨・沈線	灰黄褐色	褐灰色	長石・石英	
	123	FTR0359	Ⅲb下	B9	2群	研磨	研磨・沈線	浅黄色	灰黄色	角閃石・長石・石英	
	124	—	表土剥ぎ後清掃	—	2群	研磨・沈線	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	125	FTR0584	Va	C7	2群	研磨・沈線	研磨	褐灰色・にぶい黄橙色	褐灰色	角閃石・長石・石英	
	126	—	表土剥ぎ後清掃	—	2群	研磨	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	127	FTR0634・FTR0635	Va	D7	2群	研磨	研磨	にぶい黄橙色・褐灰色	にぶい黄橙色・灰黄褐色	角閃石・長石・石英	
	128	FTR0899	Ⅲb下	C6	2群	研磨・沈線	ナデ	橙色・黄灰色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	129	FTR0122・FTR0124 FTR0157	Ⅲb下	D5	2群	研磨	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	角閃石・長石・石英	
	130	FTR0046・FTR0193	Ⅲb上・Ⅲb下	C5・D5	2群	研磨	ナデ	橙色	灰黄色	角閃石・長石・石英	
	131	FTR0334	Ⅲb下	C10	2群	研磨	研磨	橙色・にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	132	FTR0023・FTR0203	Ⅲb上・Ⅲb下	C6・C5	2群	研磨	研磨	にぶい黄橙色・にぶい橙色	橙色	角閃石・長石・石英	
	133	FTR0036・FTR0167	Ⅲb上・Ⅲb下	C5	2群	研磨	研磨	浅黄橙色・にぶい黄橙色	灰黄色	角閃石・長石・石英・白色粒子	
	134	FTR0080	Ⅲb下	D4	2群	研磨	ナデ	にぶい黄橙色	灰白色	角閃石・長石・石英	
	135	FTR0165	Ⅲb下	C5	2群	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	
	136	FTR0232	Ⅲb下	C6	2群	研磨	研磨	にぶい橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	137	FTR0259	Ⅲb下	D7	2群	ナデ・沈線	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	角閃石・長石・石英	
	138	—	表土剥ぎ後清掃	—	3群	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	角閃石・長石・石英	
	139	—	表土剥ぎ後清掃	—	3群	—	回転ナデ	—	にぶい橙色	角閃石・長石・石英	回転糸切り

石器

Ⅴ層出土の石器（第20図・第21図）

1〜5はサヌカイトを素材とするものである。1は剥片の資料である。2・3は横長の石匙である。2は全体の半分ほどを欠損する。片面には自然面を大きく残し，刃部は連続的に丁寧な剥離を加えて直線的に仕上げる。3は横長の大型の剥片を素材として，打点付近につまみ部を作り出し，刃部は弧状をなす。4は二次加工のみられる剥片である。末端に自然面を残す横長の素材で，左右両縁辺に加工が認められる。5は「し」字状の形状をなし，末端に微細な連続的剥離が認められる。6は玄武岩の横長の剥片で，末端に微細な連続的剥離が認められる。7は灰色のチャートを素材とするスクレイパーである。8は扁平な安山岩の叩石で，周縁には打撃による摩滅と欠損が認められる。9は砂岩製の叩石である。周縁に打痕が認められる。

10は2.5㎝角の暗灰色黒曜石の石核である。自然面を残すが，限界まで剥離を行っている。11は暗灰色を呈する透明度の乏しい黒曜石の石核で，自然面は水磨を受けている。高さ3.0㎝と小さく，二度の剥離でその後の加工をやめる。12は一応異形石器とした。一部欠損があり，石鏃の未製品の可能性もある。13〜18は石鏃である。14・18は黒色黒曜石，15〜17は暗灰色黒曜石，13は玄武岩を素材としている。13・14は基部に「Ⅴ」字状の抉りを入れる。16は鍬形鏃で，17・18もおそらく鍬形鏃の脚部であろう。

19〜21は二次加工のみられる剥片で，いずれも暗灰色黒曜石を素材とする。19は片方の側辺に主要剥離面からの連続的な加工を施す。素材が厚いために石鏃の製作を断念したものであろうか。21は縦長の剥片で，末端に連続的な剥離が認められる。

22は黒色黒曜石で周縁に微細な剥離が認められる剥片である。23は暗灰色黒曜石の剥片である。いずれも自然面を残し，母岩加工の初期段階のものである。

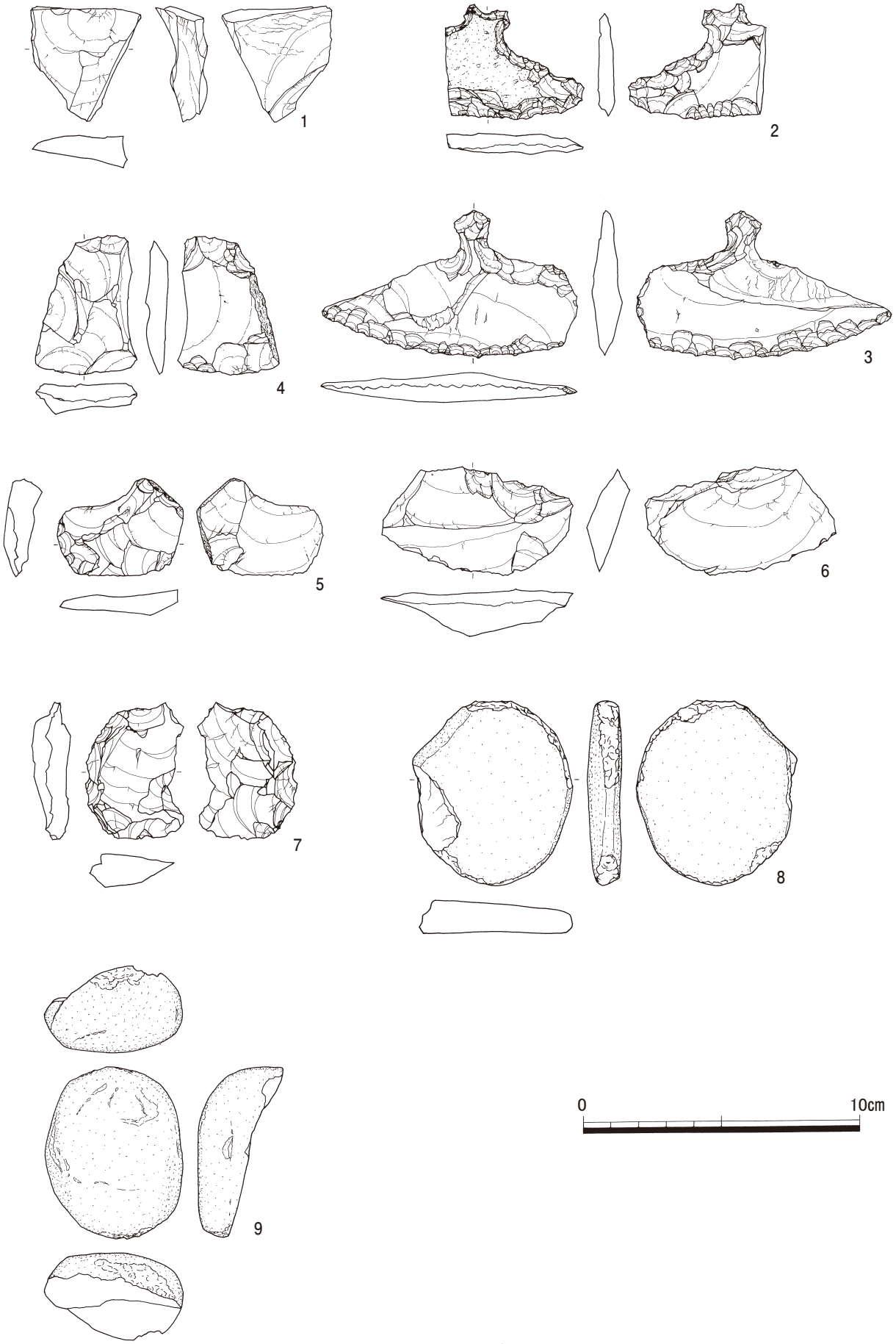
Ⅲ層出土の石器（第22図・第23図）

24はサヌカイトの石核である。背面には大きく自然面を残している。5㎝程度の大きめの剥片を剥離しており，打面の転回も認められる。25は玄武岩製の石匙である。縦長の剥片を素材とし，打点付近に粗い加工を加えてつまみ部を作り出す。末端部が欠損しているため加工の有無は不明だが，素材剥片の周縁を加工なしにそのまま刃部としていた可能性もある。26は玄武岩製のスクレイパーである。打点付近から両側縁にかけて加工を施す。27は玄武岩の縦長剥片を素材とし，両側辺に丁寧な剥離調整を行う。28は大型の剥片である。打点付近から片方の側縁と末端部に自然面を残している。

29は頁岩製の磨製石斧である。再加工のためか剥離が全体に及ぶが，完成には至っていない。30は安山岩製の打製石斧の一部である。地中などへの打ち込みの衝撃により節理面で剥落したものであろう。

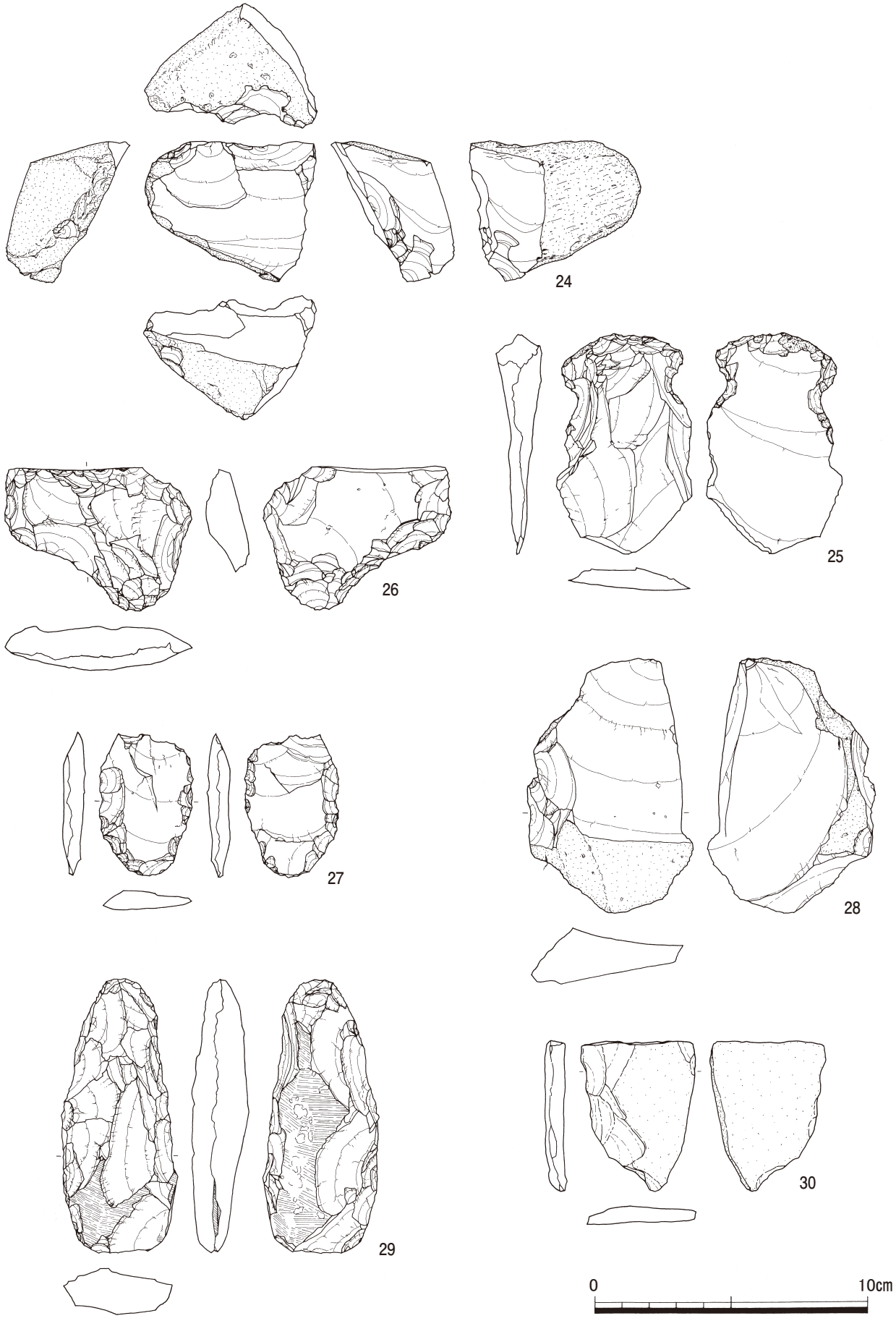
31は透明度に乏しい暗灰色黒曜石の石核である。打面転回をしながら限界近くまで剥片の剥離を行っている。32はスクレイパーで，片面に自然面をとどめる横長の一次剥片を縁辺から数度の剥離で加工し，直線的な末端部に細かい調整を加えて刃部としている。漆黒色黒曜石を素材とするが，剥離面は風化が進んでいる。34〜38は石鏃である。34はサヌカイト製，35〜37は漆黒色黒曜石製，38は暗灰色黒曜石製である。34・35・38は基部に抉りを入れる脚部を作り出すが，36は平基に近い。37は両方の脚部を欠損している。39・40は黒色の黒曜石製で，石鏃の未製品であろう。39は表裏面全体に二次加工が見られるが，大きく欠損している。40は自然面を一部に残し，縁辺からの調整剥離を行っているが，完成には至っていない。

41はサヌカイトを素材とし，2方向から切断を行っている。縁辺に主要剥離面側から直線的に連続的な調整を行っている。42は暗灰色黒曜石の小型の剥片を素材とし，末端部を切断したあとに切断面から自然面に向かって連続的な二次加工を施している。

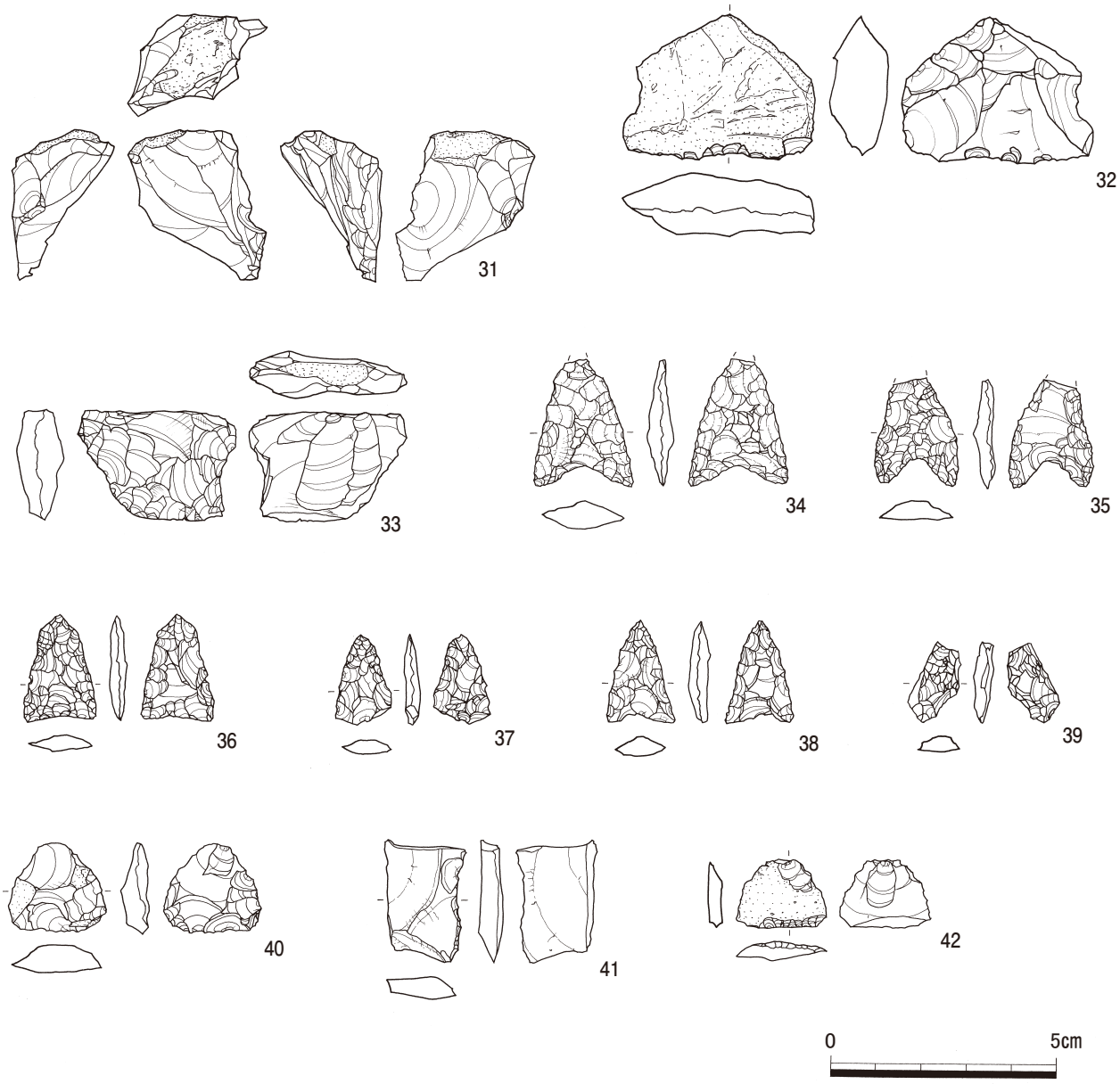


第20図　Ⅴ層出土の石器①（S=1/2）

第21図　Ⅴ層出土の石器②（S=2/3）



第22図　Ⅲ層出土の石器①（S=1/2）



第23図　Ⅲ層出土の石器②（S=2/3）

⑷　まとめ

今回の古作遺跡の発掘調査における主な成果として，①島原半島東部においてはじめて轟式土器を検出したこと，②縄文時代早・前期の土器群（1群土器）と縄文時代後・晩期の土器群（2群土器）を層位的なまとまりとして検出したこと，③Ⅲ層1群土器とⅤ層2群土器を隔てるようにⅣ層とした雲仙眉山の火山活動に伴う噴出物（権現脇火砕サージ）を検出したこと，があげられる。

出土位置の記録を行った遺物904点についてみてみる。Ⅲ層出土の土器58.0%，Ⅴ層出土の土器42.0%に対して，石器はⅢ層出土が25.8%，Ⅴ層出土が74.2%となっている。また，時期ごと層位別にみた土器の出土率は，1群土器の89.9%がⅤ層から，2群土器の87.2%がⅢ層からである。固結した土石流堆積物のうえに火山灰質の土壌が浅く堆積するという雲仙火山東麓に特有の地盤ゆえに倒木痕なども多く，土層攪乱などの影響を多少考慮する必要があると考えるが，おおよそ遺物群の新旧関係を

第4表　石器観察表

図	番号	取上番号	石材	器種	層位	グリッド	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
20	1	FTR0662	サヌカイト	剥片	Va	B8	4.2	4.0	1.9	20.6
	2	FTR0856	サヌカイト	石匙	Vb	C12	4.9	4.1	0.7	14.2
	3	FTR0561	サヌカイト	石匙	Va	C6	9.2	5.4	1.1	32.8
	4	FTR0801	サヌカイト	二次加工剥片	Vb	C7	5.0	3.7	1.1	18.5
	5	FTR0760	サヌカイト	微細剥離剥片	Vb	C6	3.5	4.5	1.4	13.7
	6	FTR0432	玄武岩A	微細剥離剥片	Va	D3	3.9	6.9	1.7	27.4
	7	FTR0479	チャート	スクレイパー	Va	D5	4.9	3.6	1.4	21.9
	8	FTR0761	安山岩	叩石	Vb	C6	6.7	5.8	1.2	61.2
	9	FTR0888	砂岩	叩石	Vb	B11	6.2	5.0	3.1	88.8
21	10	FTR0863	黒曜石D	石核	Vb	C6	1.9	2.6	2.5	12.4
	11	FTR0726	黒曜石B	石核	Vb	E4	3.0	2.0	2.2	11.0
	12	FTR0521	黒曜石B	異形石器	Va	C6	3.1	1.7	0.6	1.9
	13	FTR0530	玄武岩A	石鏃	Va	D6	1.7	1.5	0.3	0.5
	14	FTR0465	黒曜石A	石鏃	Va	D5	1.9	1.7	0.2	0.6
	15	FTR0715	黒曜石B	石鏃	Va	B11	2.2	1.5	0.3	0.6
	16	FTR0709	黒曜石B	石鏃	Va	C10	3.4	1.9	0.5	2.7
	17	FTR0798	黒曜石B	石鏃	Vb	D7	1.0	1.1	0.3	0.2
	18	FTR0885	黒曜石A	石鏃	Vb	B10	1.1	0.9	0.4	0.4
	19	FTR0738	黒曜石B	二次加工剥片	Vb	D5	2.2	2.5	1.1	5.6
	20	FTR0614	黒曜石B	二次加工剥片	Va	C7	2.2	1.9	0.7	2.1
	21	FTR0648	黒曜石B	二次加工剥片	Va	D8	2.7	1.8	0.6	1.7
	22	FTR0747	黒曜石C	微細剥離剥片	Vb	D5	3.0	2.8	0.6	3.5
	23	FTR0457	黒曜石B	剥片	Va	D4	3.8	2.9	0.9	9.2
22	24	FTR0396	サヌカイト	石核	Ⅲb下	C7	5.2	6.3	4.5	96.1
	25	FTR0376	玄武岩A	石匙	Ⅲb下	D4	8.1	5.0	1.7	47.8
	26	FTR0188	玄武岩A	スクレイパー	Ⅲb下	D5	5.3	6.9	1.6	56.3
	27	FTR0381	玄武岩B	スクレイパー	Ⅲb下	D5	5.2	3.5	0.8	15.0
	28	FTR0391	玄武岩B	剥片	Ⅲb下	C4	9.4	6.1	2.1	94.4
	29	FTR0296	頁岩	磨製石斧	Ⅲb下	C7	10.0	4.3	2.1	92.8
	30	FTR0325	安山岩	打製石斧	Ⅲb下	C9	5.5	4.3	0.8	20.1
23	31	FTR0309	黒曜石B	石核	Ⅲb下	C8	3.3	3.1	2.2	12.0
	32	FTR0126	黒曜石B	スクレイパー	Ⅲb下	D4	3.2	4.3	1.4	16.8
	33	—	黒曜石A	スクレイパー	Vb上面		2.5	3.5	1.1	8.9
	34	FTR0295	サヌカイト	石鏃	Ⅲb下	C7	2.8	2.2	0.6	2.5
	35	FTR0355	黒曜石A	石鏃	Ⅲb下	B11	2.4	1.8	0.5	1.5
	36	FTR0315	黒曜石A	石鏃	Ⅲb下	C8	2.4	1.6	0.4	1.3
	37	FTR0242	黒曜石A	石鏃	Ⅲb下	C6	2.0	1.3	0.3	0.7
	38	FTR0342	黒曜石D	石鏃	Ⅲb下	B10	2.3	1.5	0.5	1.3
	39	FTR0074	黒曜石A	石鏃未製品	Ⅲb下	E4	1.8	1.2	0.4	0.6
	40	FTR0116	黒曜石A	石鏃未製品	Ⅲb下	D5	2.0	2.2	0.7	2.3
	41	FTR0373	サヌカイト	二次加工剥片	Ⅲb下	D4	2.8	1.8	0.5	3.2
	42	FTR0272	黒曜石B	二次加工剥片	Ⅲb下	D7	1.5	2.0	0.4	1.3

層位的に検出できたものと考える。出土数量からの単純比較になってしまうが，2群土器段階のほうが1群土器段階よりも石器に対する依存度が高かった可能性がうかがわれる。

1群土器については細分が可能で，今後それぞれの時期差や並行関係を検討していかなければならない。2群土器については，若干縄文時代晩期に時期が下る可能性のあるものがみられるが，大部分は縄文時代後期後葉に位置づけられるものである。

石器についてみてみると，在地の雲仙火山起源のデイサイトが石器の素材として使われることはほぼなかったようで，剥片石器，礫石器ともに基本的には搬入石材に頼っている。剥片石器については，黒曜石と玄武岩・サヌカイトが主体を占める。肉眼観察によるが，黒曜石は，漆黒色で透明度の高いもの（A），暗灰色で透明度の乏しいもの（B），黒色で透明度の乏しいもの（C），暗灰色で透明度はあるが剥離面がざらつくもの（D）がみられる。また，玄武岩については，暗灰色で粗い剥離面のもの（A），灰色で浅黄色の微細な不純物を含むもの（B），灰色で灰黄色の線条が多く入るもの（C），がみられる。黒曜石Aは佐賀県伊万里の腰岳産，黒曜石Bは長崎県北部の針尾産と考えられる。Ⅴ層出土石器のなかで黒曜石Bの多さは目を引き，こうした状況は近隣の下末宝遺跡や権現脇遺跡など，島原半島東部における縄文時代早期の時期に共通する傾向である。一方，古作遺跡では出土数が少なく判然としないが，縄文時代晩期から突帯文期になると黒曜石Aへの依存度が高まる傾向も近隣遺跡ではみられる。石器素材に乏しい島原半島東部における石材供給システムの解明は，今後の課題としたい。

第5表　出土遺物内訳

	Ⅲb上層	Ⅲb下層	Ⅲ層小計	Ⅴa層	Ⅴb層	Ⅴ層小計	総　計
土　器	43	275	318	154	76	230	548
石　器	9	83	92	171	93	264	356
総　計	52	358	410	325	169	494	904

第6表　出土土器群類別内訳

	Ⅲb上層	Ⅲb下層	Ⅲ層小計	Ⅴa層	Ⅴb層	Ⅴ層小計	総　計
1群土器	3	16	19	99	68	167	186
1群A類				3	1	4	4
1群B類				2	9	11	11
1群C類				16	9	25	25
1群D類		1	1		1	1	2
1群E類	1	5	6	29	17	46	52
1群F類	1	1	2	3	3	6	8
1群G類	1	9	10	46	28	74	84
1群Ga類		1	1	9	1	10	11
1群Gb類	1	7	8	30	24	54	62
1群Gc類		1	1	7	3	10	11
2群土器	39	254	293	38	5	43	336
不　明	1	5	6	17	3	20	26
総　計	43	275	318	154	76	230	548

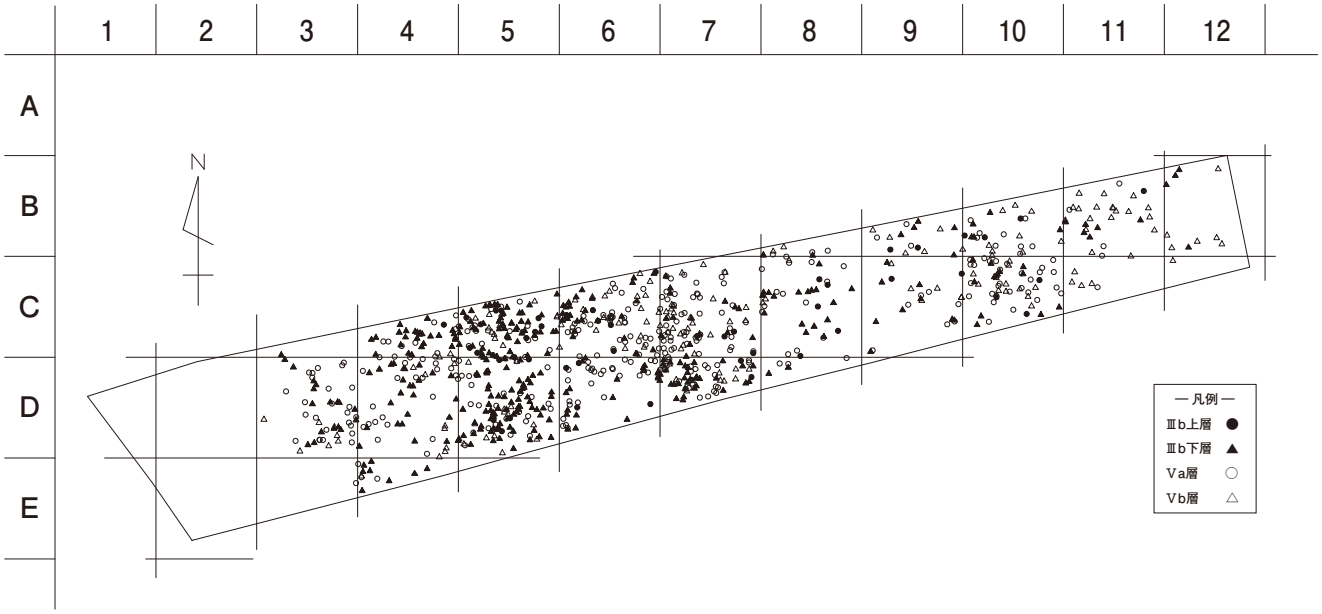
第7表　出土石器石材別内訳

	Ⅲb上層	Ⅲb下層	Ⅲ層小計	Ⅴa層	Ⅴb層	Ⅴ層小計	総　計
黒曜石	4	47	51	120	74	194	245
黒曜石A	2	14	16	27	31	58	74
黒曜石B	2	31	33	89	39	128	161
黒曜石C				3	2	5	5
黒曜石D		2	2	1	2	3	5
玄武岩	4	16	20	26	4	30	50
玄武岩A	1	8	9	20	4	24	33
玄武岩B	3	7	10	5		5	15
玄武岩C		1	1	1		1	2
サヌカイト	1	12	13	22	12	34	47
安山岩		2	2	1	2	3	5
砂岩		3	3		1	1	4
チャート				2		2	2
頁岩		2	2				2
凝灰岩		1	1				1
総　計	9	83	92	171	93	264	356

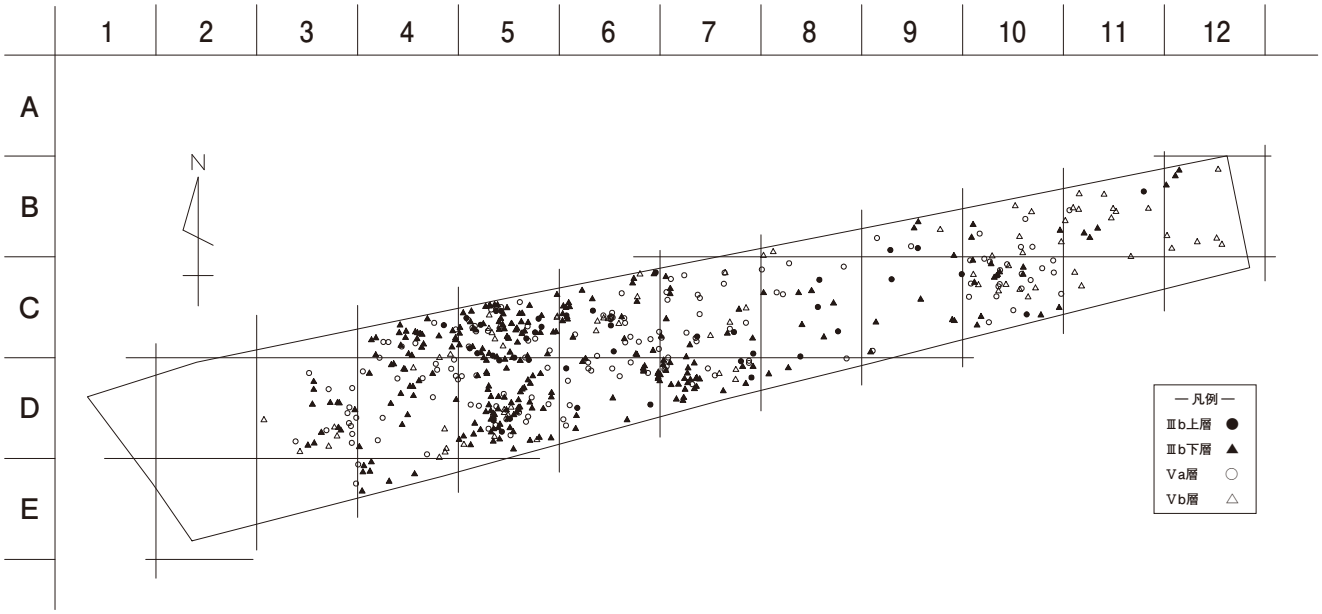
権現脇火砕サージについては，これまで雲仙眉山の山頂から南2.5㎞の距離に位置する権現脇遺跡のみでしか確認されていなかったが，今回南5.1㎞の距離にある古作遺跡においても検出された。このことは，雲仙眉山の縄文期の噴火活動について，その規模や状況を復元していくうえでの大きな情報となろう。また，権現脇遺跡の遺物の出土状況から権現脇火砕サージ堆積の時期を縄文時代早期末以降，縄文時代晩期以前と考えてきたが，今回の古作遺跡の発掘成果によってさらに絞りこませ，縄文時代前期轟式土器段階以降，縄文時代後期後葉以前での位置づけが可能となった。

島原半島東部においては，縄文時代の前期から後期にかけての遺跡がほぼ見当たらず，その要因の一つを，眉山をはじめとする雲仙火山の活動に求めることができるのではないかと考えている。縄文遺跡の消長や，遺跡における石器素材をはじめとした生活物資の供給システムの在り方，あるいはその解体と再構築といった問題に，雲仙火山の活動が深く関与する可能性を指摘しておきたい。

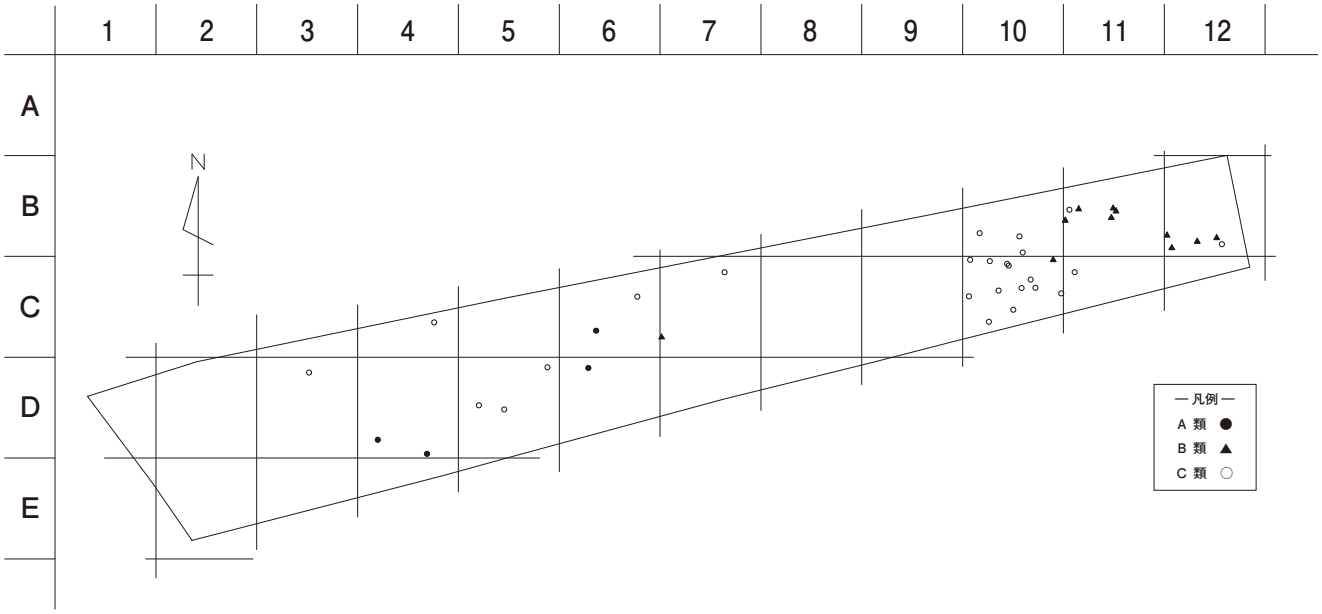
［参考文献］　本多和典編　2004　『下末宝遺跡』深江町文化財調査報告書第1集　深江町教育委員会
本多和典編　2006　『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集　深江町教育委員会



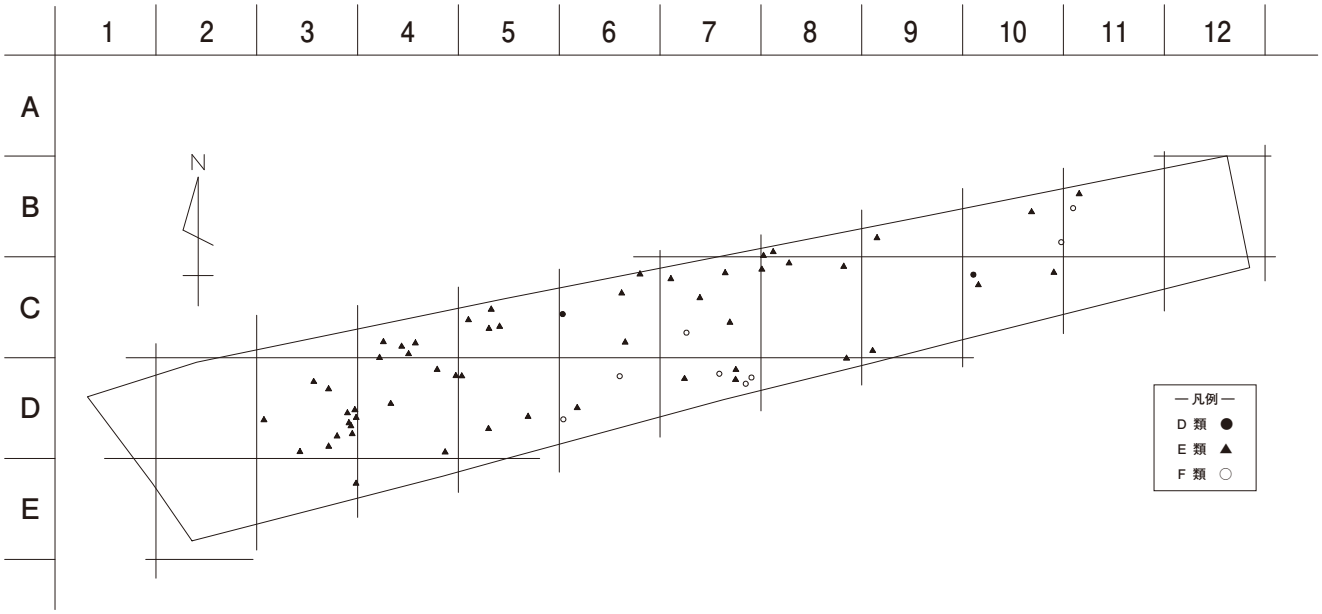
第24図　土器・石器の分布［全体］(S=1/300)



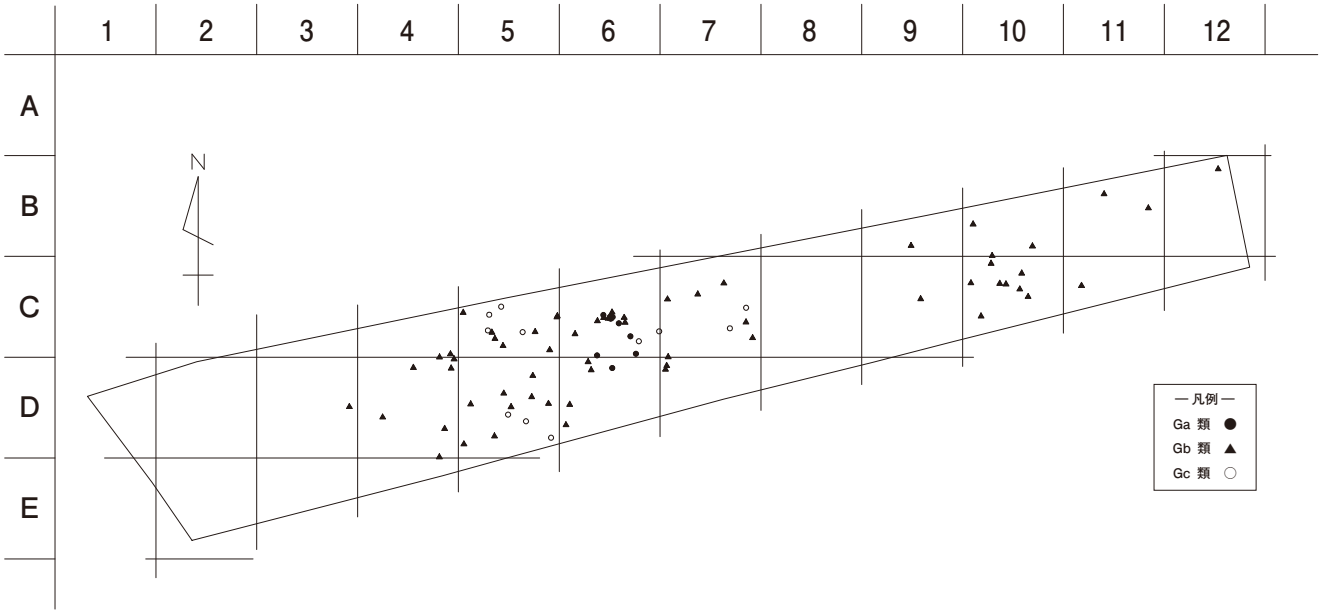
第25図　土器の分布①［全体］(S=1/300)



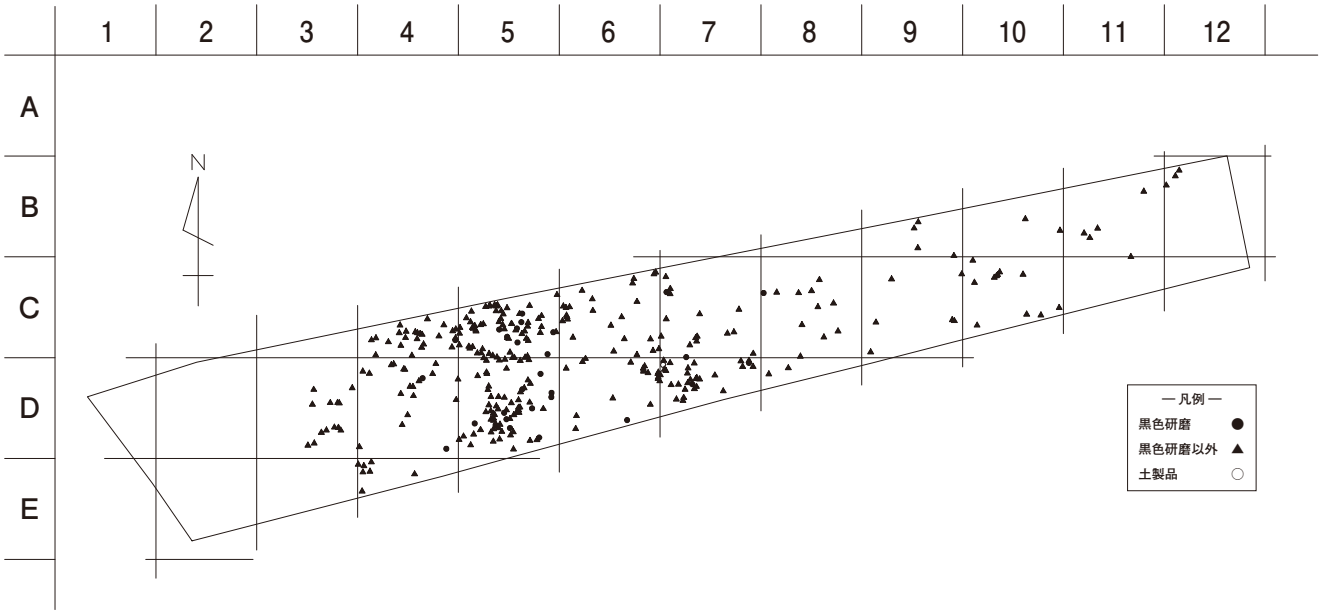
第26図　土器の分布②［1群A ～ C類］(S=1/300)



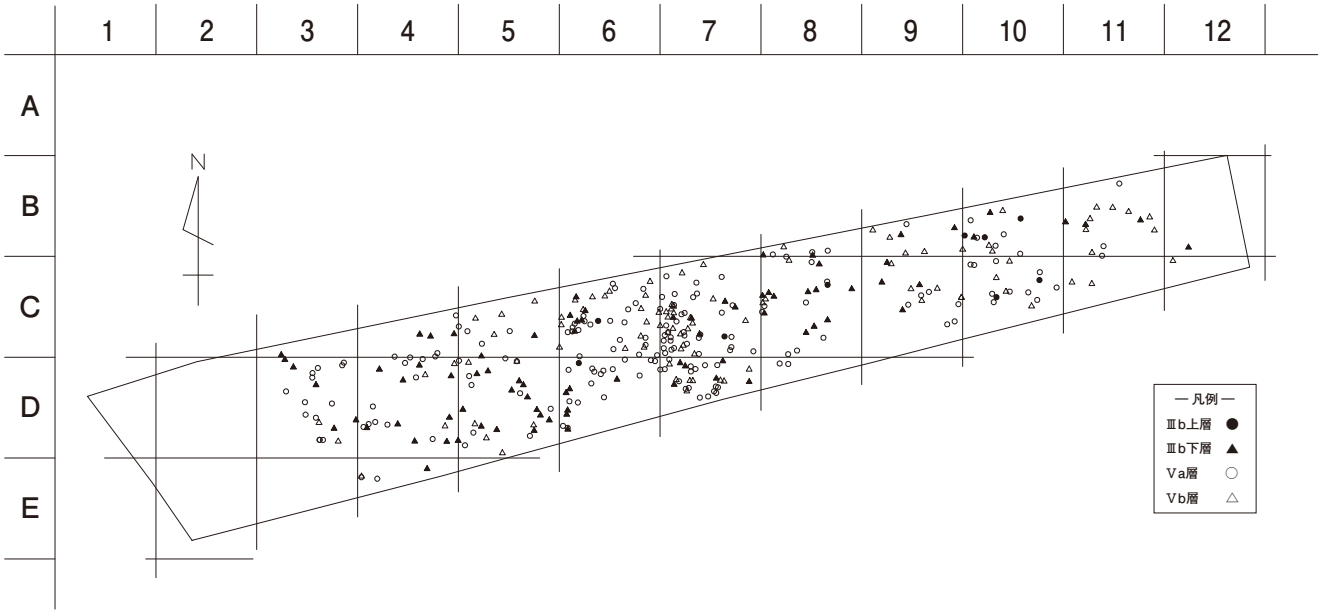
第27図　土器の分布③［1群D ～ F類］(S=1/300)



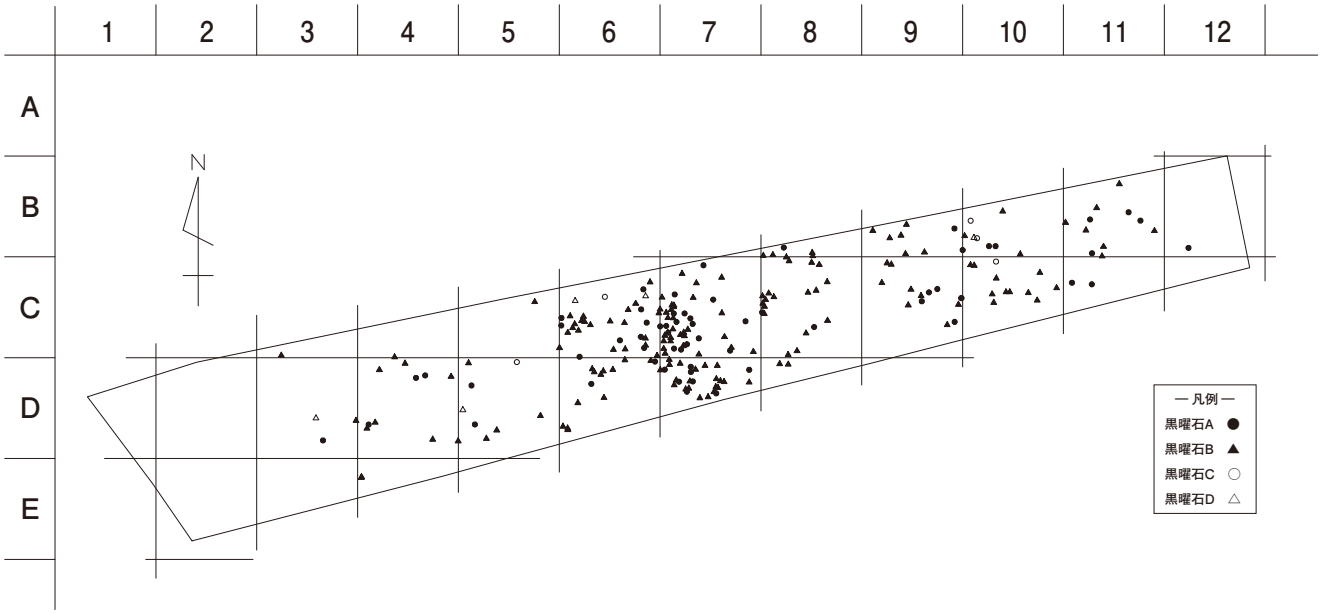
第28図　土器の分布④［1群G類］(S=1/300)



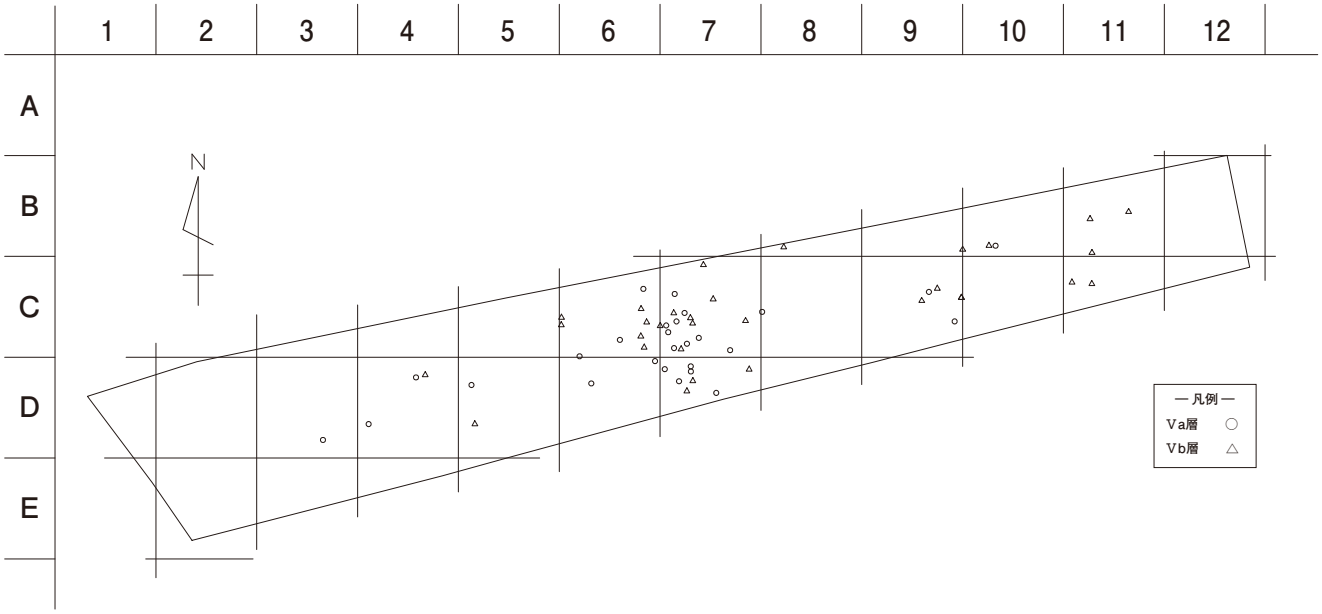
第29図　土器の分布⑤［2群］(S=1/300)



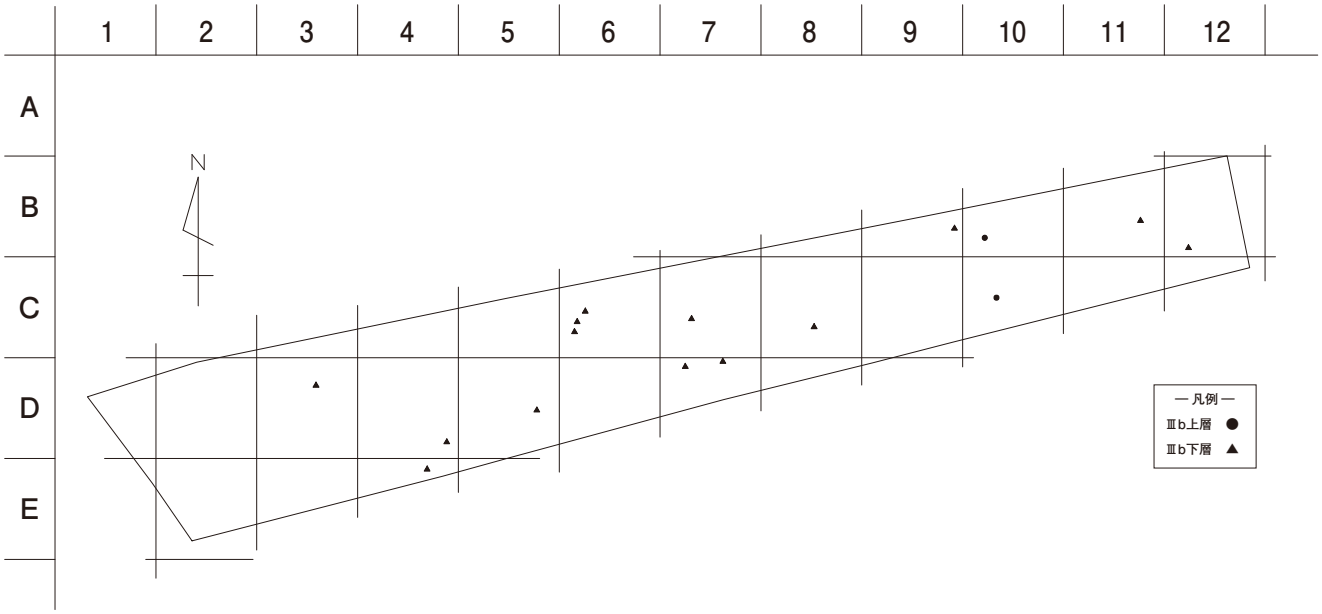
第30図　石器の分布①［全体］(S=1/300)



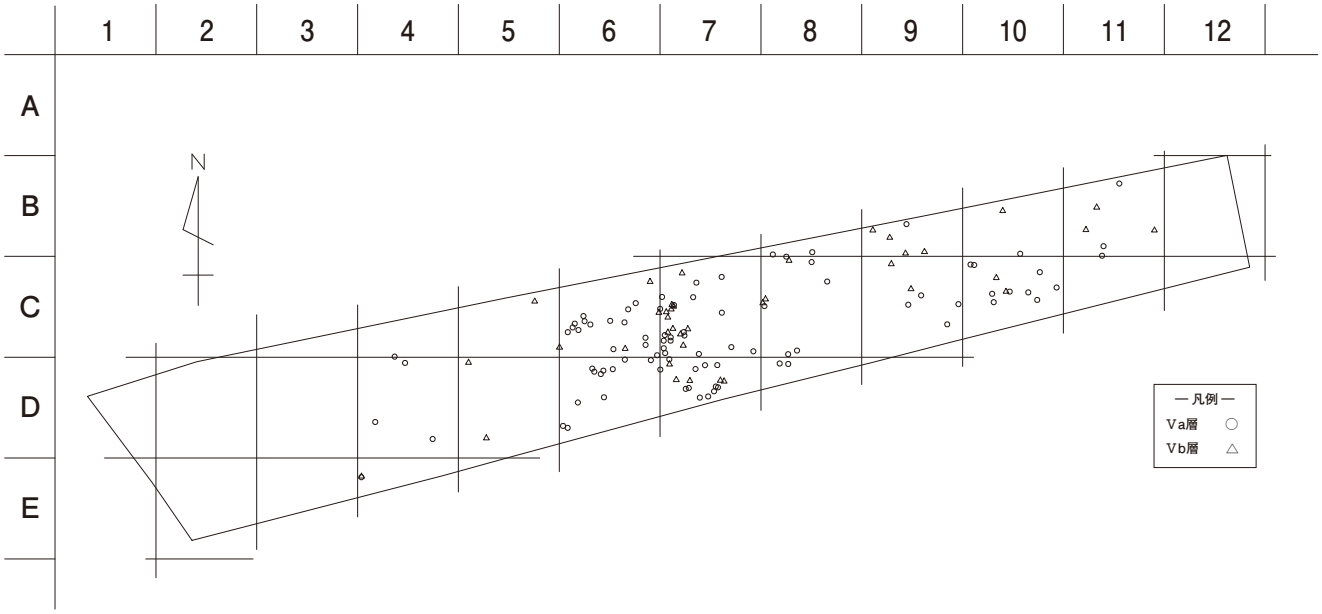
第31図　石器の分布②［黒曜石A ～ D］(S=1/300)



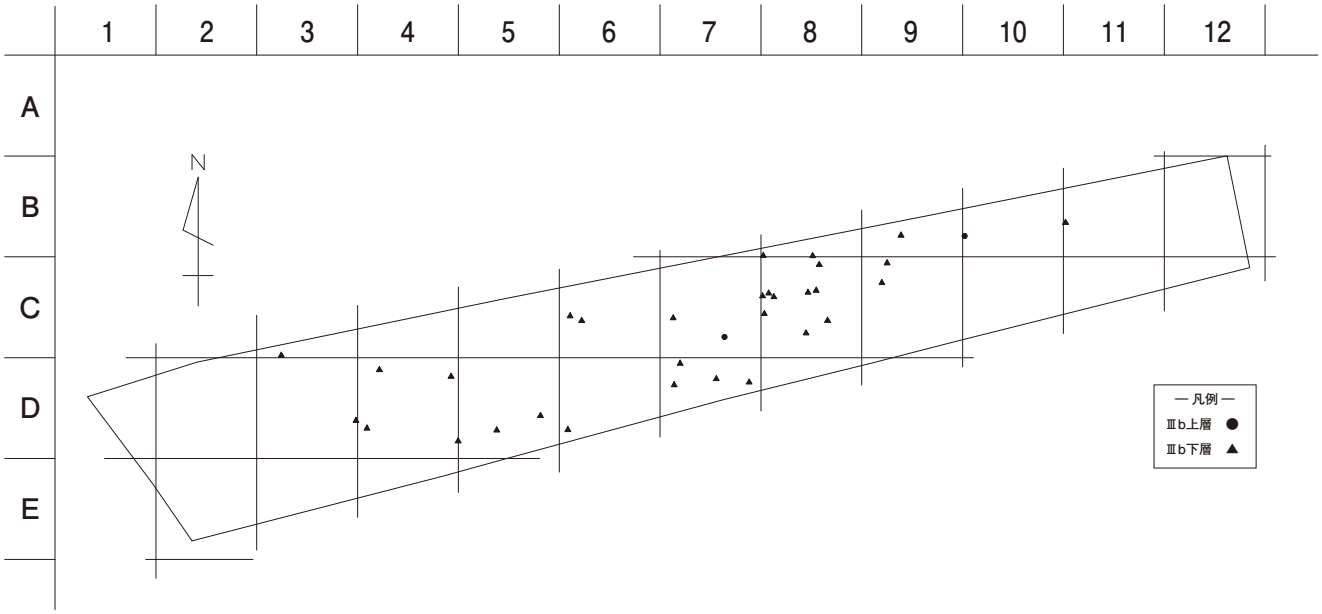
第32図　石器の分布③［Va・Vb層出土の黒曜石A］(S=1/300)



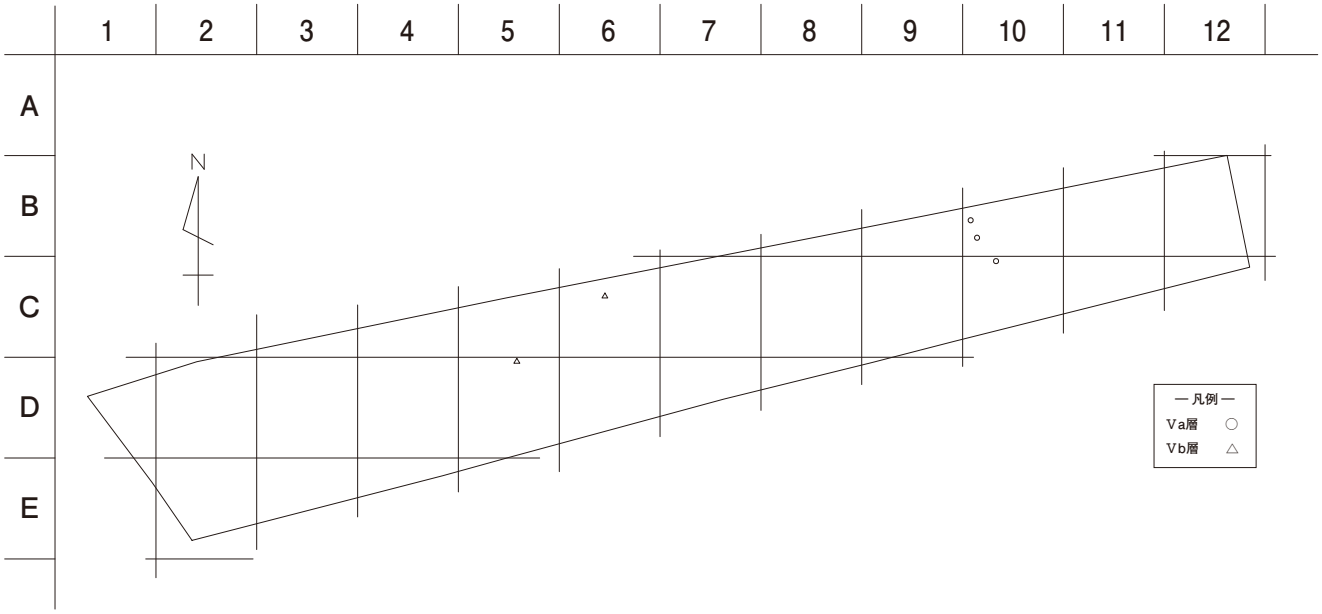
第33図　石器の分布④［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の黒曜石A］(S=1/300)



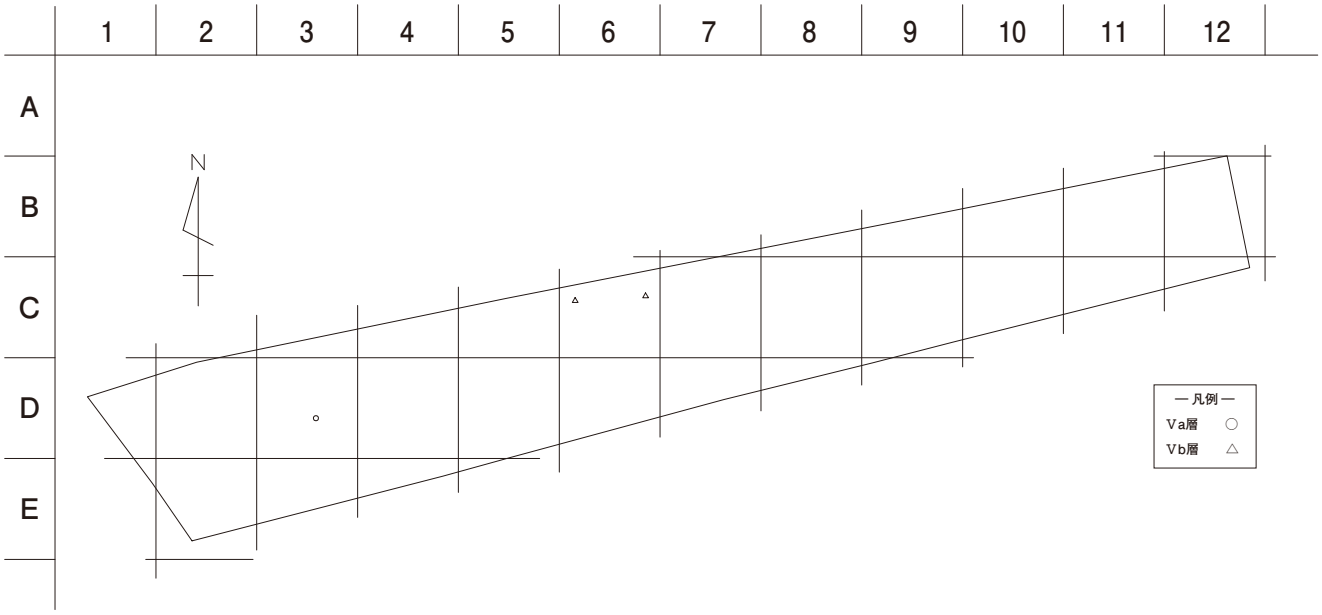
第34図　石器の分布⑤［Va・Vb層出土の黒曜石B］(S=1/300)



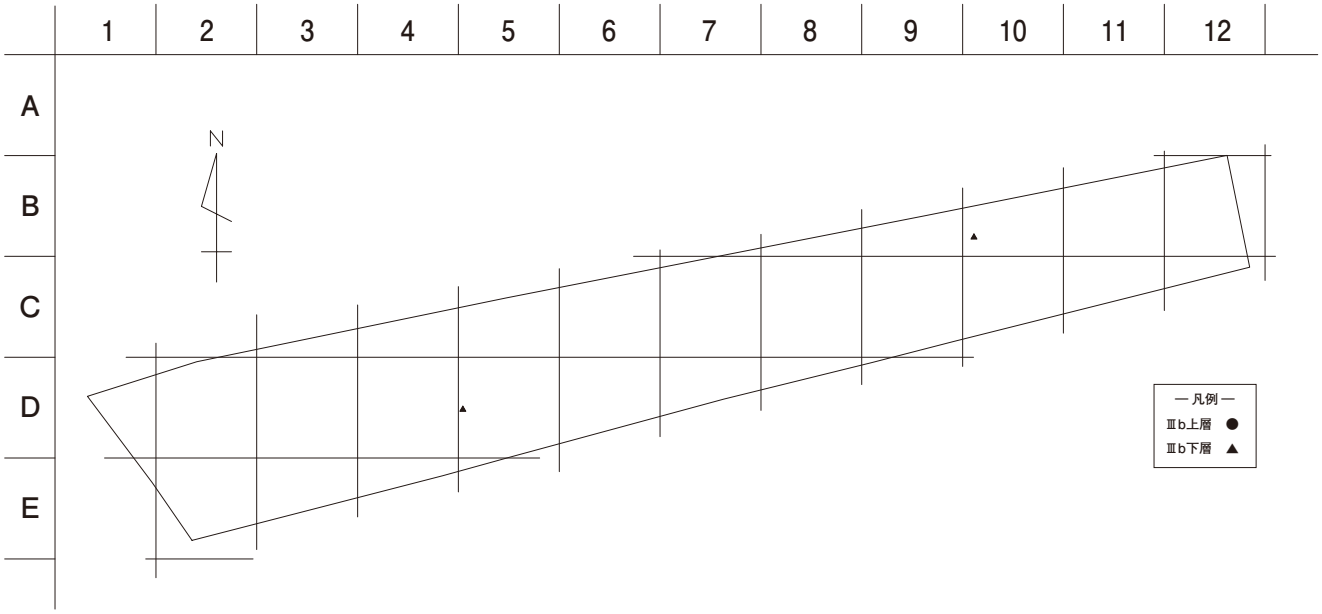
第35図　石器の分布⑥［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の黒曜石B］(S=1/300)



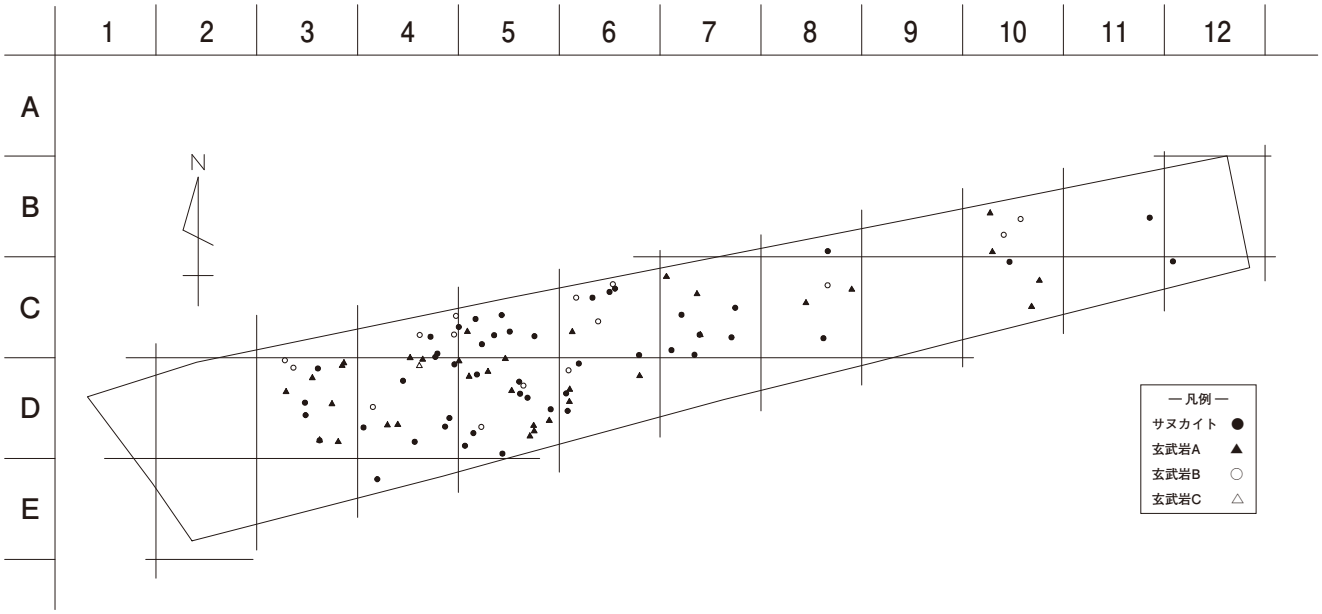
第36図　石器の分布⑦［Va・Vb層出土の黒曜石C］(S=1/300)



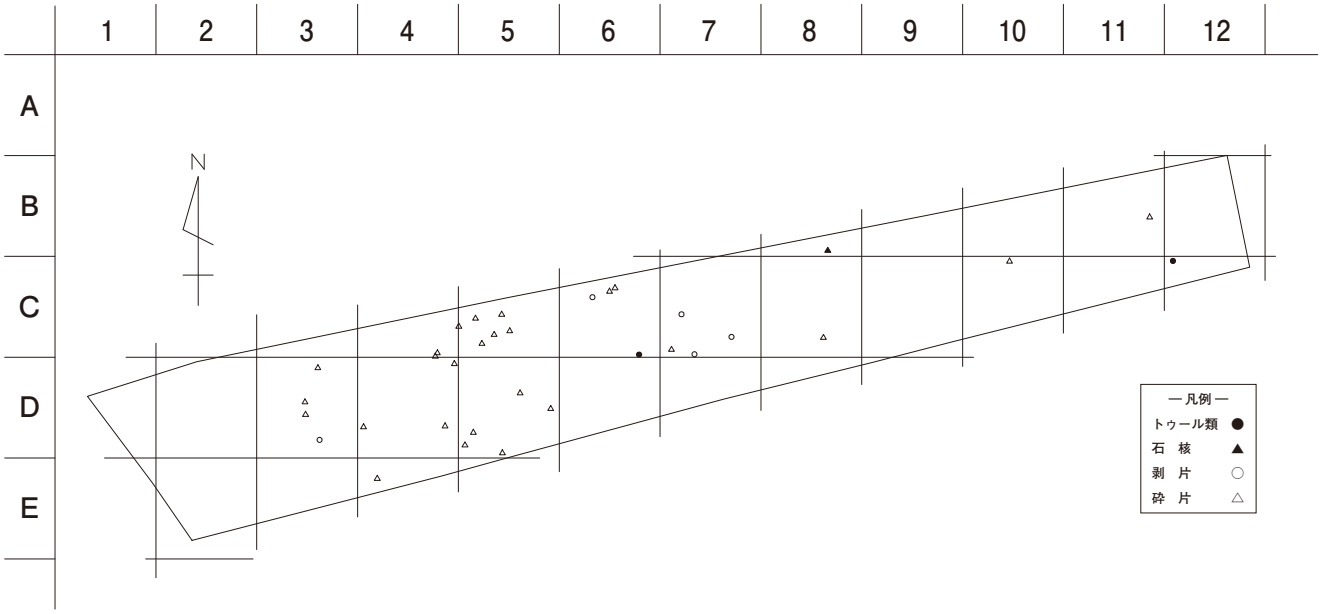
第37図　石器の分布⑧［Va・Vb層出土の黒曜石D］(S=1/300)



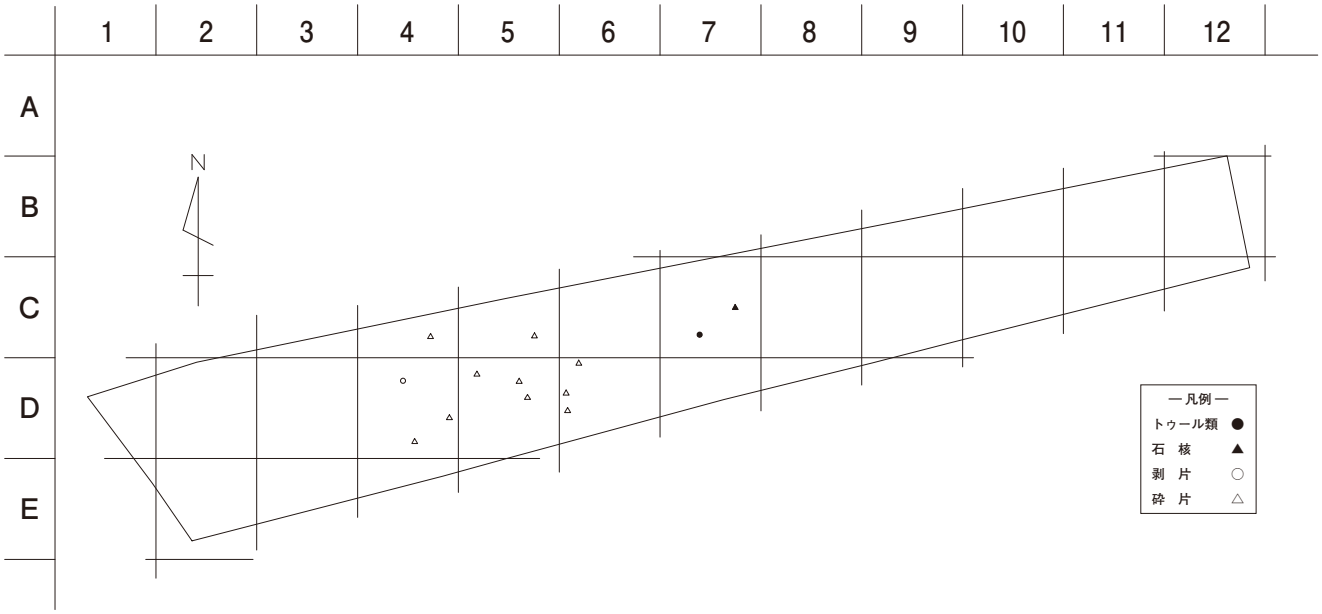
第38図　石器の分布⑨［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の黒曜石D］（S=1/300）



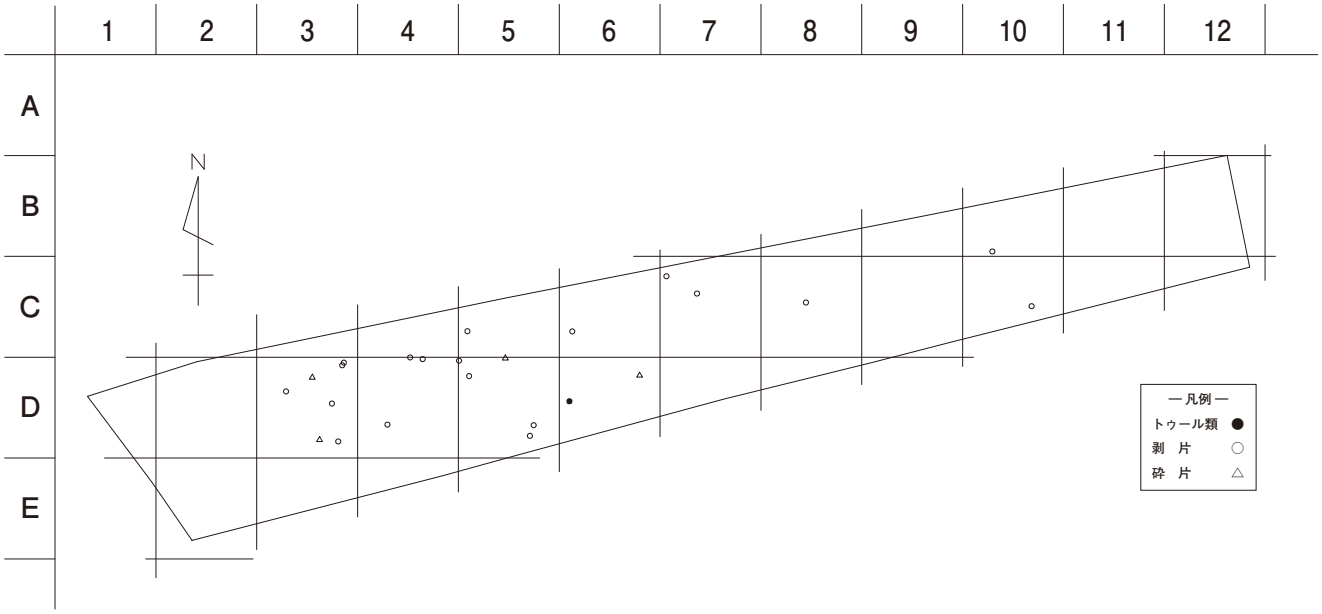
第39図　石器の分布⑩［サヌカイト・玄武岩A ～ C］（S=1/300）



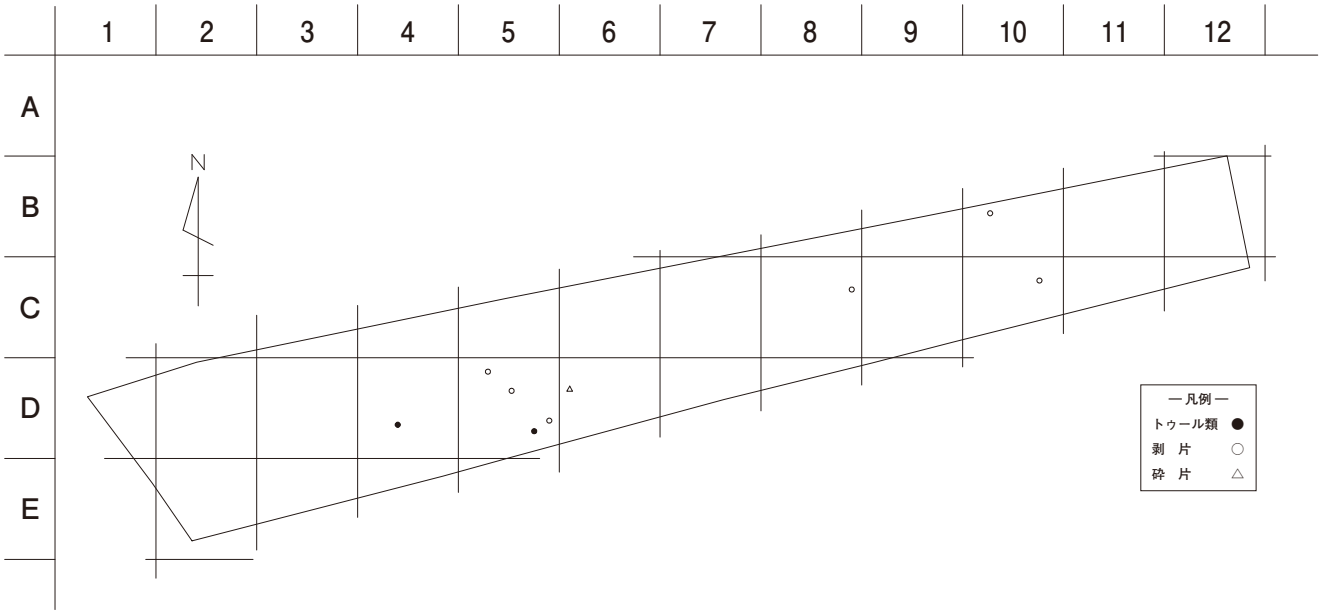
第40図　石器の分布⑪［Va・Vb層出土のサヌカイト］(S=1/300)



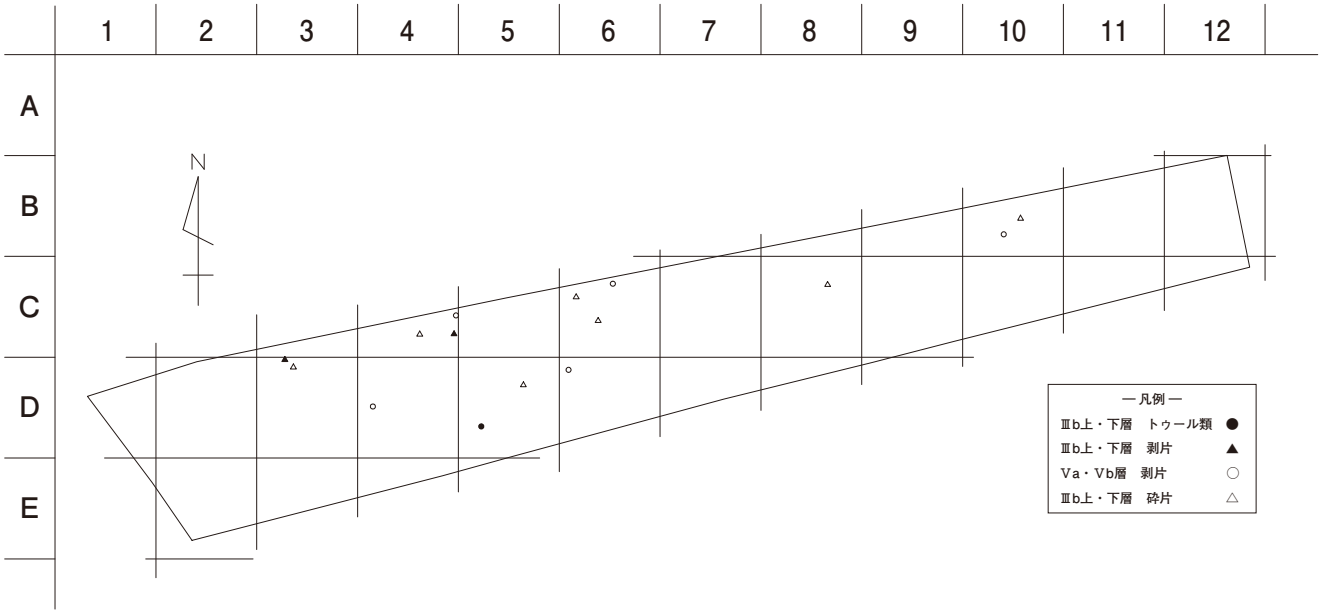
第41図　石器の分布⑫［Ⅲb上・Ⅲb下層出土のサヌカイト］(S=1/300)



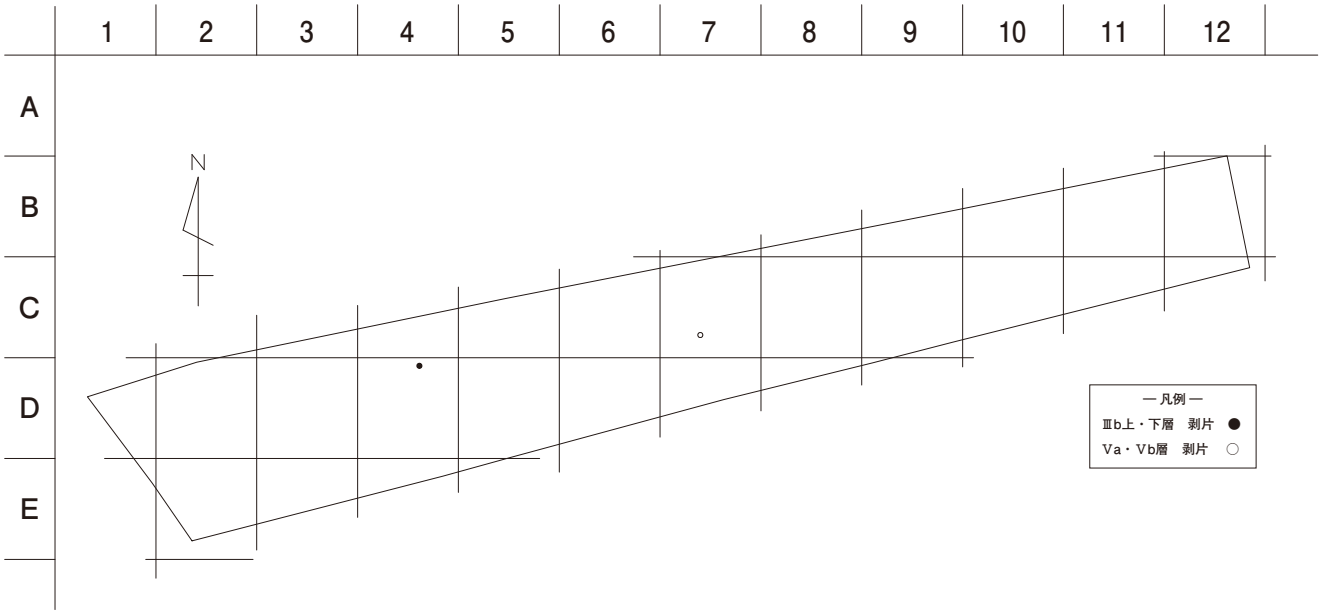
第42図　石器の分布⑬［Va・Vb層出土の玄武岩A］(S=1/300)



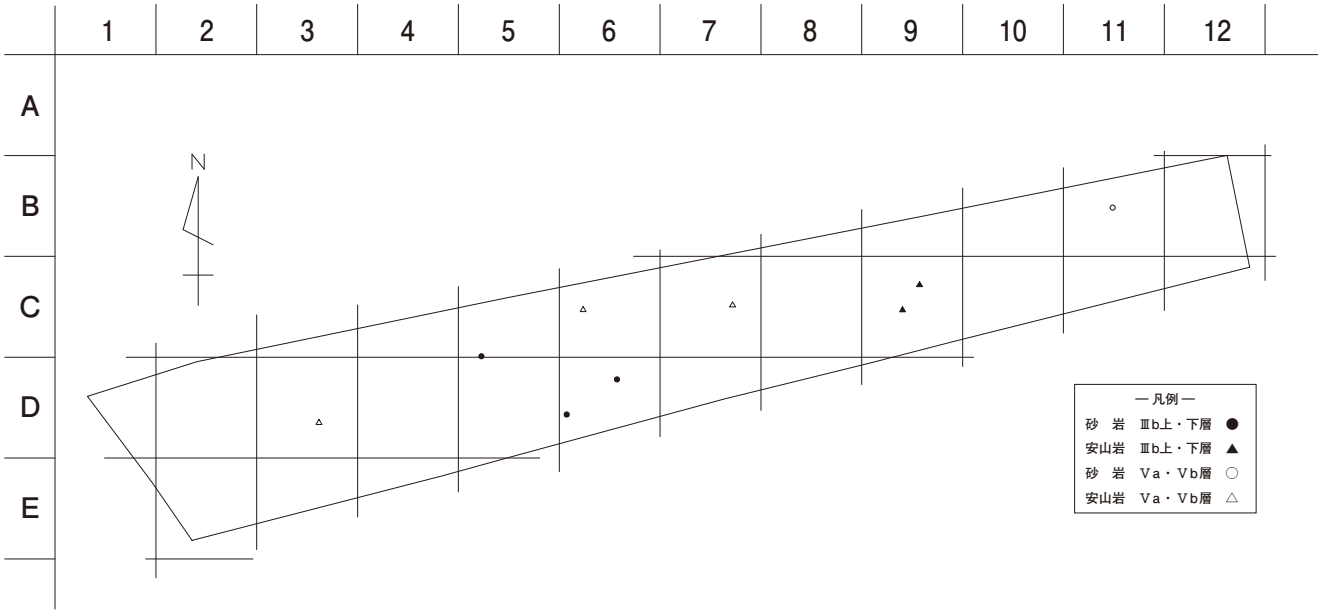
第43図　石器の分布⑭［Ⅲb上・Ⅲb下層出土の玄武岩A］(S=1/300)



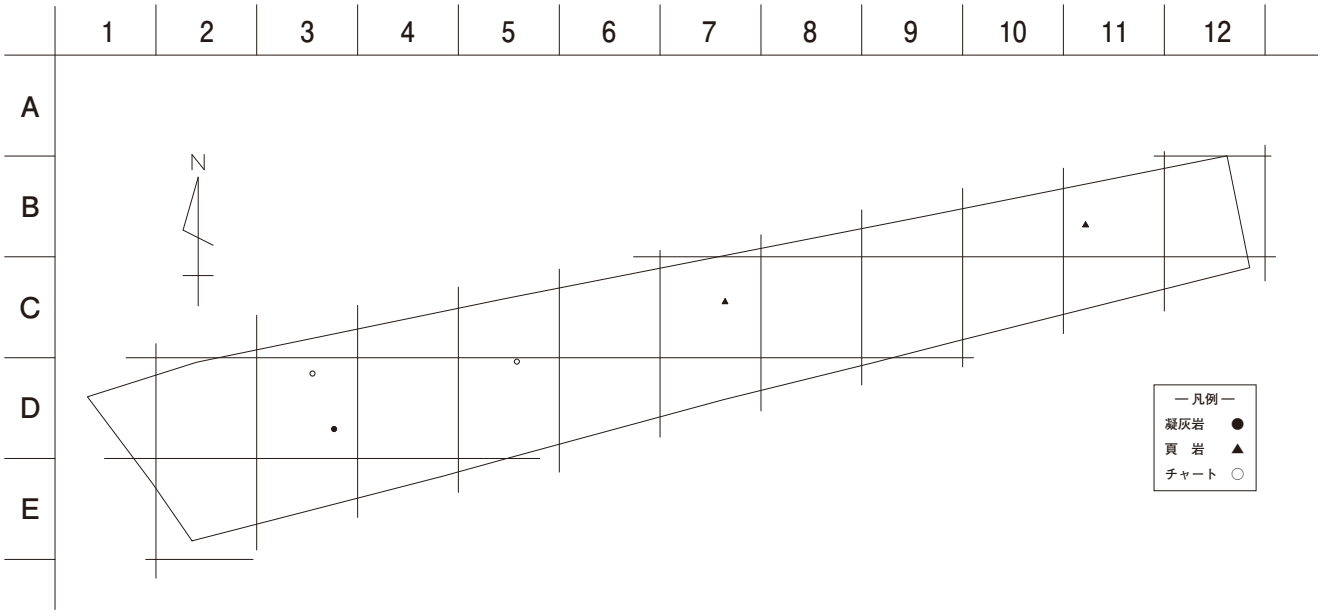
第44図　石器の分布⑮［玄武岩B］（S=1/300）



第45図　石器の分布⑯［玄武岩C］（S=1/300）



第46図　石器の分布⑰［砂岩・安山岩］（S=1/300）



第47図　石器の分布⑱［凝灰岩・頁岩・チャート］（S=1/300）

図　　版

航空写真（南から）

図版2

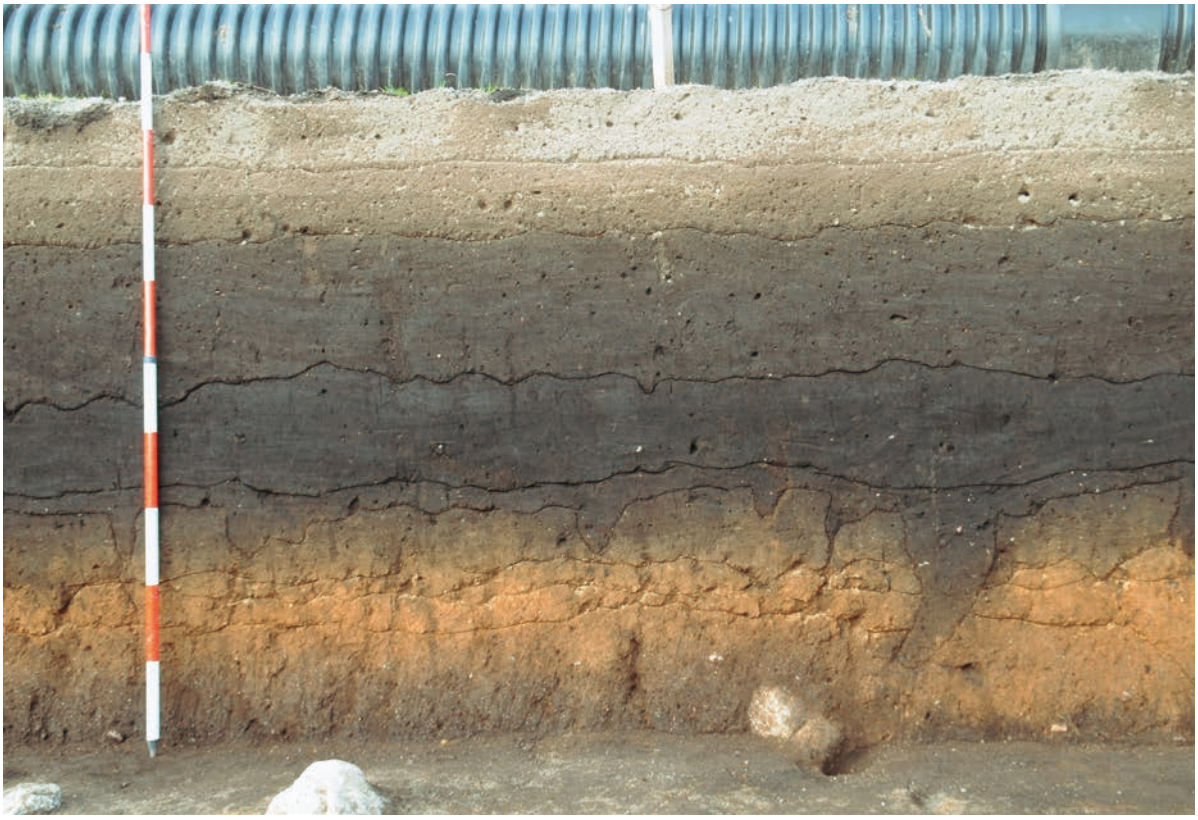
航空写真（北から）

航空写真（俯瞰）

図版4

本調査区表土剥ぎ前の状況（東から）

表土剥ぎ状況（西から）



調査区北壁土層（南から）

調査区北壁土層（東から）

図版6

Ⅲ層遺物出土状況（西から）

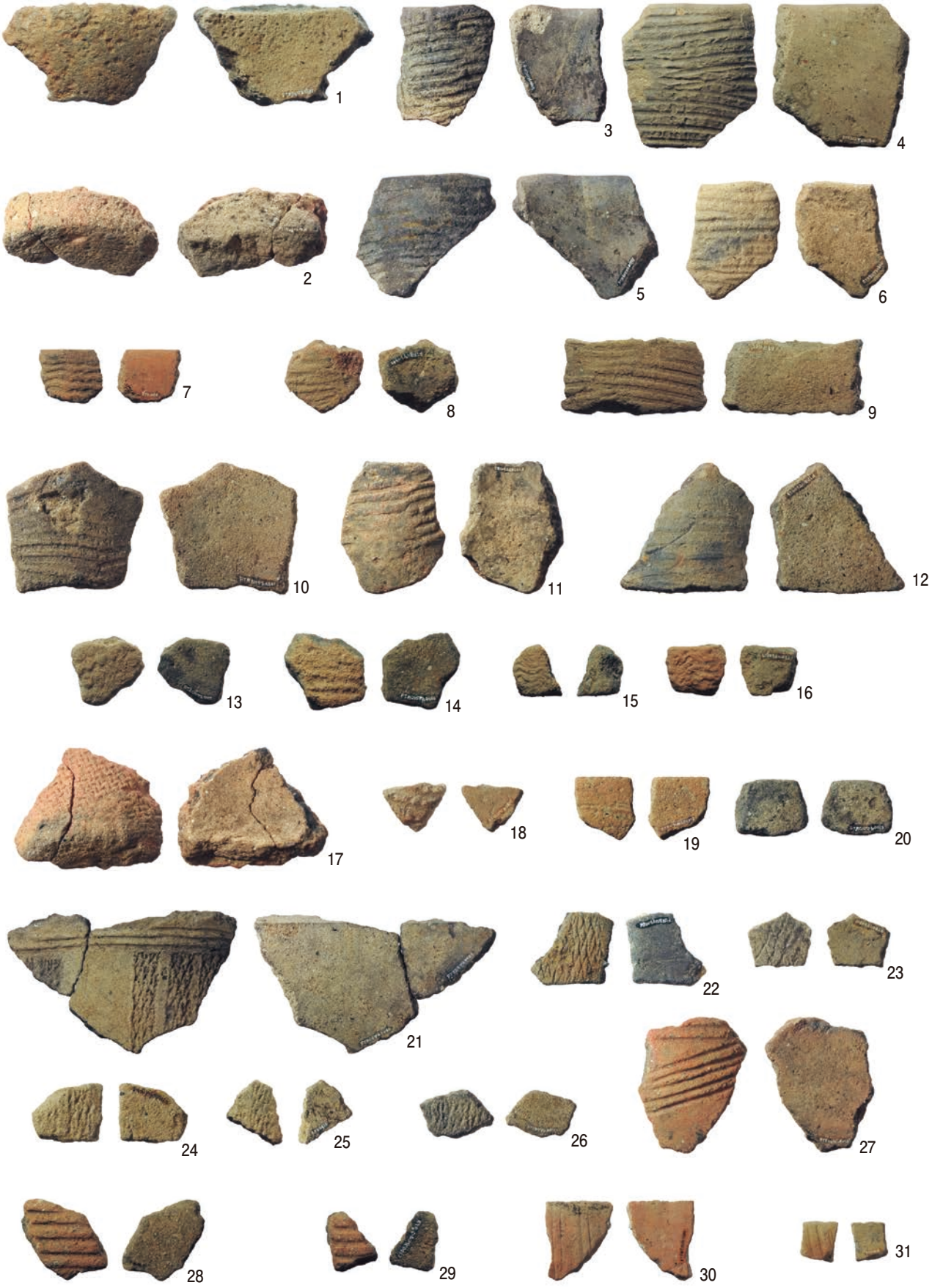
Ⅴ層遺物出土状況（東から）

溝検出状況（北東から）

土坑検出状況（東から）

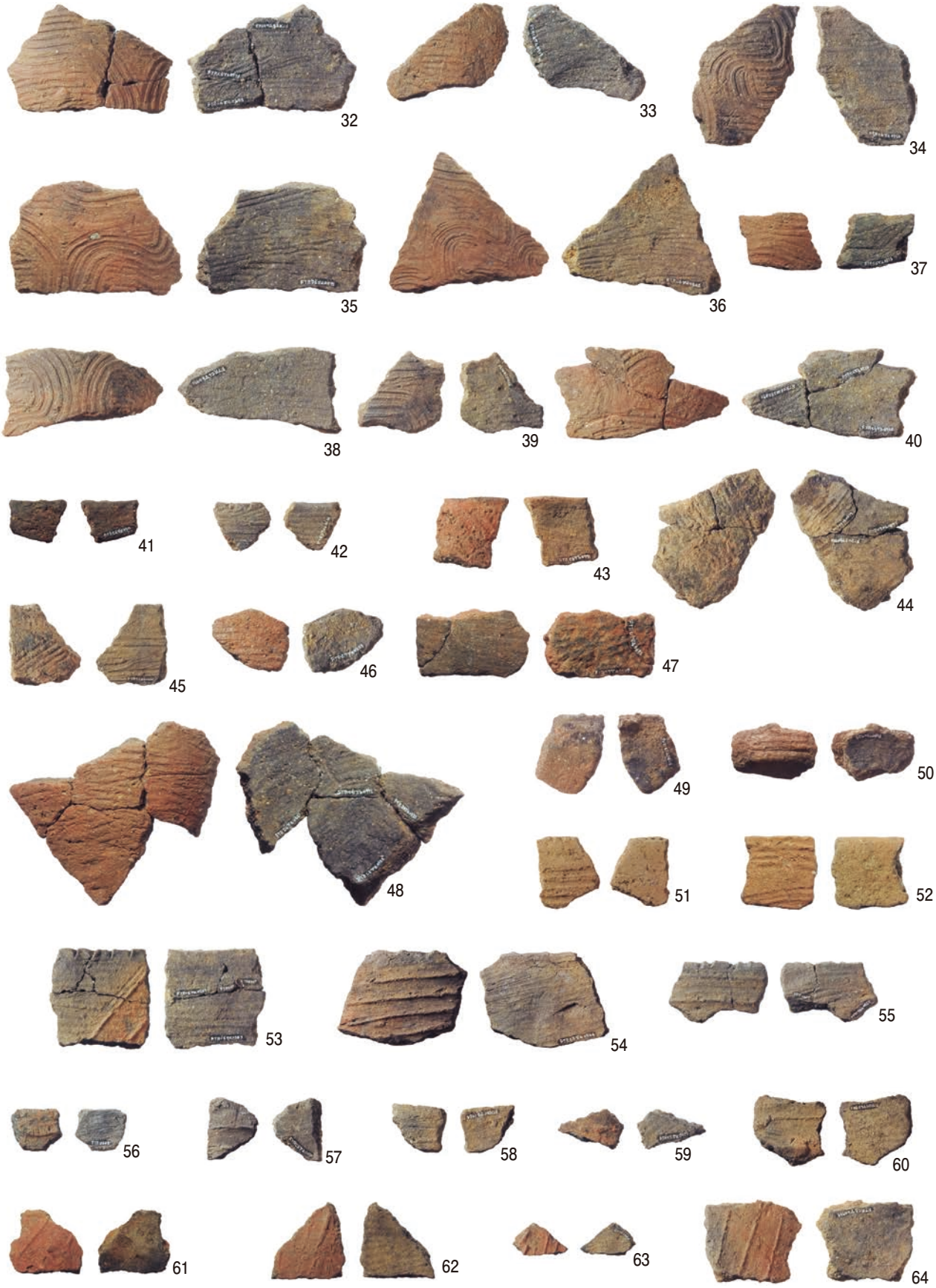
図版8

遺物出土状況

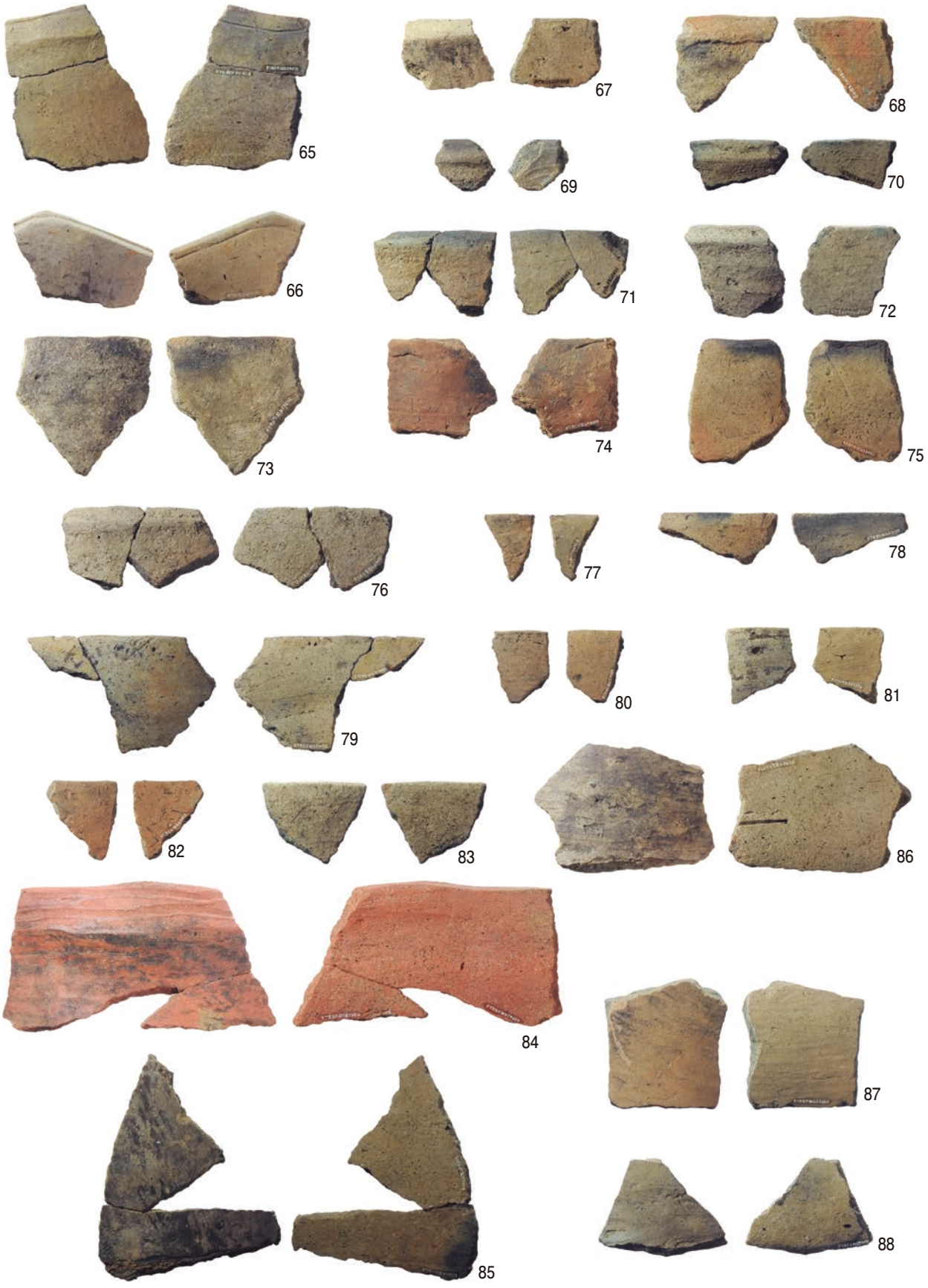


縄文時代早・前期の土器①

図版10

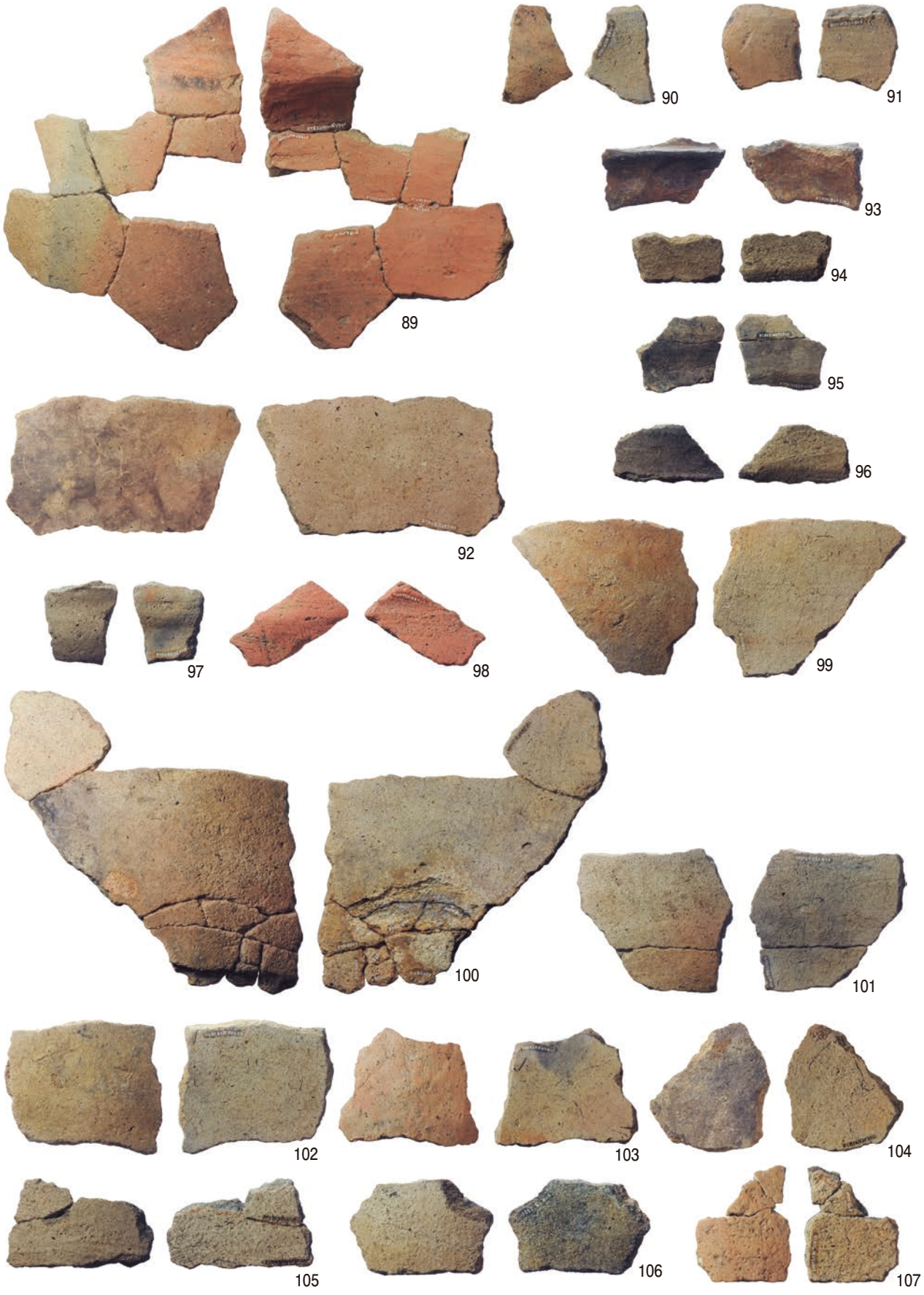


縄文時代早・前期の土器②



縄文時代後・晩期の土器①

図版12

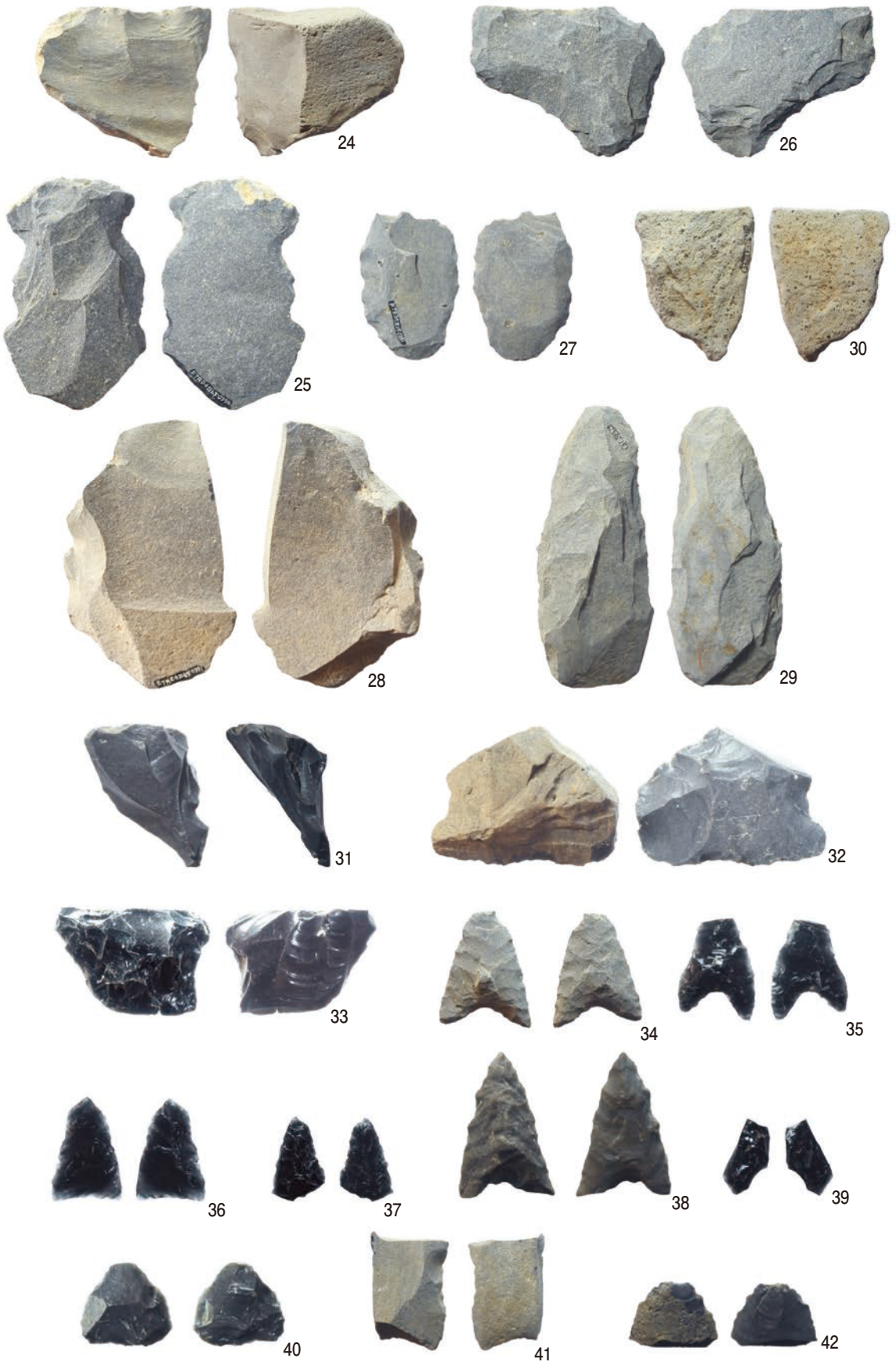


縄文時代後・晩期の土器②

縄文時代後・晩期の土器③・その他の土器

図版14

Ⅴ層出土の石器



Ⅲ層出土の石器

報告書抄録

ふりがな	ふるつくりいせき
書名	古作遺跡
副書名	小林地区農道整備事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	本多　和典
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地　TEL 0957-73-6705
発行年月日	西暦2018年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ふるつくり 古作遺跡	みなみしまばらし 南島原市 ふかえちょう 深江町	42214	146	32° 43′ 32″	130° 19′ 20″	131127 ～ 140131	256㎡	小林地区 農道整備 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古作遺跡	遺物包含地	縄文時代 中・近世	溝、土坑 （中・近世）	轟式土器 黒色磨研土器	

南島原市文化財調査報告書　第10集

古　作　遺　跡

2018.3.31

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　諫早印刷株式会社